

別所前遺跡
－ 4 次調査の成果－
Bessyomae Site
The 4th excavation report

浜松市教育委員会

2020 年 7 月

Hamamatsu Municipal Board of Education, July, 2020



別所前遺跡4

2020 年 7 月

浜松市教育委員会

例 言

- 1 本書は静岡県浜松市東区市野町 2215 番 1 で実施した別所前遺跡 4 次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社エステート・パートナーの宅地造成工事に伴う道路整備工事（公道移管部分）に先立ち実施した。現地発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業は、株式会社エステート・パートナーの依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施した。
- 3 発掘調査にかかわる費用は、全額株式会社エステート・パートナーが負担した。
- 4 発掘調査の面積と期間は、以下の通りである
調査面積 210 m²
調査期間 現地調査 令和元年（2019）11 月 5 日～11 月 20 日
 整理作業 令和元年（2019）12 月 1 日～令和 2 年（2020）7 月 31 日
- 5 発掘調査は、鈴木京太郎（浜松市市民部文化財課）・川西啓喜（同）が担当し、北澤志織（同）、山崎明日香（同）、安川あや（同）が補佐した。整理作業及び本書の編集・写真撮影は、川西が担当し、北澤が補佐した。
- 6 本書の執筆は、第 1 章 2 を川西・北澤が、その他を川西が担当した。
- 7 調査の記録、出土遺物は浜松市市民部文化財課が保管している。
- 8 本書における方位は磁北、標高は海拔である。
- 9 土層・土器の色調は新版『標準土色帖』（農林水産庁農林技術会議局監修）に準拠した。
- 10 本書における遺構の略記号は以下のとおりとする。
SD：溝 SK：土坑 SP：小穴 SX：性格不明遺構
- 11 本文中の引用文献等の表記については、以下のよう略す。
（財）浜松市文化協会→浜文協
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所→静岡埋研

目 次

例 言

第1章 序 論	1
1 調査に至る経緯	1
2 別所前遺跡をめぐる環境	1
第2章 調査成果	4
1 確認調査（3次調査）の成果	4
2 本発掘調査（4次調査）の成果	7
第3章 総 括	23
1 発掘調査の成果	23
2 今後の展望	23
出土遺物観察表	25

報告書抄録

図 版

第1章 序 論

1 調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯 別所前遺跡は静岡県浜松市東区市野町に位置する、天竜川が形成した氾濫平野の微高地に展開する弥生時代～古墳時代の遺跡である。現在、遺跡の周辺は水田として利用されており、当時の地形を伺うことは困難である。別所前遺跡は、1977年に弥生土器が採集されたことにより遺跡の存在が明らかとなったが、これまでに本格的な調査は行われておらず、遺跡の様相は不鮮明なところが多い。一方、別所前遺跡の西側に位置する田見合遺跡では、過去の発掘調査で弥生時代後期の環濠と推定される溝が（浜文協 2002）、箕輪遺跡でも同時代の水田跡が確認されており（静埋研 1994）、集落の存在が想定される。

2019年に別所前遺跡の包蔵地内において、宅地造成の計画が浮上したため、対象地内において予備調査（3次調査）を実施した。調査の結果、対象地の西側を中心に弥生時代後期を中心とした遺構・遺物が確認された。こうした結果を受けて開発事業者と遺跡の取扱いについて協議を行った結果、将来的に公道へ移管される道路整備区域の一部を対象として本発掘調査を実施した。

調査の経過 本発掘調査は、株式会社エステート・パートナーの依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施した。現地調査は2019年11月5日から11月20日にかけて実施した。調査対象面積は約210 m²である。

2 別所前遺跡をめぐる環境

（1）地理的環境

別所前遺跡は、天竜川が形成した氾濫平野上に立地する。西に位置する三方原台地と東に位置する磐田原台地との間において、天竜川の流路は幾度となく変更を繰り返している。天竜川は幾筋もの支流が入り乱れていたと考えられ、これらの支流は、現在の小河川に引き継がれ、現在でも安定した水量を保つ安間川や馬込川を形成した。別所前遺跡が立地する氾濫平野は、南北約3km、東西約1.5kmの範囲の規模をもち、天王低地と呼称される（加藤 1994 静埋研 1994）。氾濫平野内には、自然堤防（微高地）と旧河道上に形成された低地が網目状に広がっており、現在では、低地は主に水田として活用されている。別所前遺跡は、この低地から微高地にかけて所在する。



Fig.1 別所前遺跡の位置

(2) 歴史的環境

縄文時代以前 天竜川の沖積平野に立地する宮竹野際遺跡において、縄文時代晩期後半の土器が出土しているが、その他の遺跡では、遺構・遺物は確認されておらず不明確な点が多い。

弥生時代 中期になると天王町村東遺跡、天王中野遺跡、田見合遺跡において僅かに土器が確認されているが、依然として当時の様相は不明である。しかし、後期になると天竜川平野における遺跡数は、急激に増加する。天王中野遺跡、市野遺跡、田見合遺跡、箕輪遺跡等において後期の遺構・

遺物が確認されており、別所前遺跡でも同時期の遺構・遺物が確認されている。出土する遺物量も後期には急激に増加し、当地に居住した人口の増加がうかがえる。また、箕輪遺跡では後期前半の、中田北遺跡では後期の水田跡が確認されており、天王低地が広域に渡って水田として利用されていたと考えられる。

古墳時代 古墳時代に入ると別所前遺跡周辺の様相は不明瞭になる。遺物が天王中野遺跡や箕輪遺跡などで僅かに出土しているが、弥生時代後期に営まれた大規模な集落は解体され、集落規模が縮小化されたと考えられる。

古代 律令体制が敷かれると、別所前遺跡の周辺は遠江国長田郡に属したが、709年（和銅2年）に長上郡と長下郡に分割され、長上郡に属した。

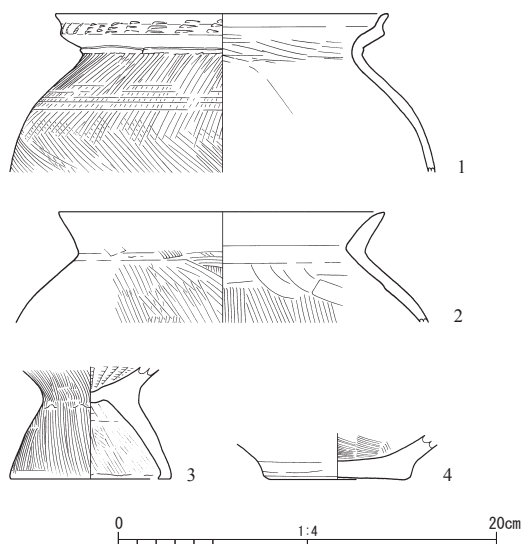


Fig.2 別所前遺跡における過去（1977）の採集遺物



Fig.3 別所前遺跡周辺の遺跡分布

天王中野遺跡や中田北遺跡では掘立柱建物跡などの遺構が検出されており、上新屋遺跡では竪穴住居跡が確認されている。また、別所前遺跡の南には永田遺跡群が展開し、官衙関連遺物が確認されている。一方、別所前遺跡近傍では箕輪遺跡において、墨書土器や人形土製品などの官衙関連遺物が出土している。

さらに、大蒲町村東Ⅰ・Ⅱ遺跡では木簡をはじめ、多くの木製品も確認されており、長上郡の中心部と考えられる。

中世以降 鎌倉時代になると、天王中野遺跡では掘立柱建物跡が、中田北遺跡では屋敷の区画溝と考えられる遺構が確認されており、引き続き集落が営まれる。ところが、14世紀になると集落の移動に伴い同地域の集落は廃絶する。廃絶した集落はその後急速に島畑化が進行し、中世の遺構の多くは以後の耕作の影響によって消滅したと考えられる。

Tab.1 別所前遺跡周辺の主な発掘調査一覧

遺跡調査名	種別	調査原因	調査期間	調査面積	報告書など
別所前遺跡1次	確認調査	店舗建設	2012年3月1日	24 m ²	浜松市教委 2013『浜松市文化財調査報告』
別所前遺跡2次	確認調査	店舗建設	2018年6月4日	24 m ²	浜松市教委 2020『浜松市文化財調査報告』
別所前遺跡3次	確認調査	宅地造成	2019年8月6日	40 m ²	本書
別所前遺跡4次	本発掘調査	宅地造成	2019年11月5日～20日	210 m ²	本書
田見合遺跡1次	確認・本発掘調査	老人福祉施設建設	2001年11月13日～22日・2002年6月6日	69 m ²	浜松市文協 2002『田見合遺跡』
田見合遺跡2次	確認調査	貸事務所建設	2008年7月7日	16 m ²	浜松市教委 2010『浜松市試掘調査概要』
田見合遺跡3次	工事立会	貸事務所建設	2008年7月11日～12日	165 m ²	浜松市教委 2011『浜松市試掘調査概要』
田見合遺跡4次	確認調査	宅地造成	2013年9月30日～10月1日	24 m ²	浜松市教委 2015『浜松市文化財調査報告』
箕輪遺跡1次	確認・本発掘調査	専門学校建設	1992年7月1日、8月1日～11月30日	417 m ²	静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994『箕輪遺跡』
箕輪遺跡2次	確認調査	店舗建設	2000年5月18日	30 m ²	
箕輪遺跡3次	確認調査	個人住宅建設	2012年1月23日	8 m ²	浜松市教委 2013『浜松市文化財調査報告』
箕輪遺跡4次	確認調査	集合住宅建設	2012年6月14日	16 m ²	浜松市教委 2014『浜松市文化財調査報告』
箕輪遺跡5次	確認調査	土地開発	2015年11月24日、27日	40 m ²	浜松市教委 2017『浜松市文化財調査報告』
箕輪遺跡6次	確認調査	店舗建設	2019年6月3日	36 m ²	浜松市教委 2021『浜松市文化財調査報告』
天王遺跡2次	確認調査	送電鉄塔建設	2000年10月3日	20 m ²	

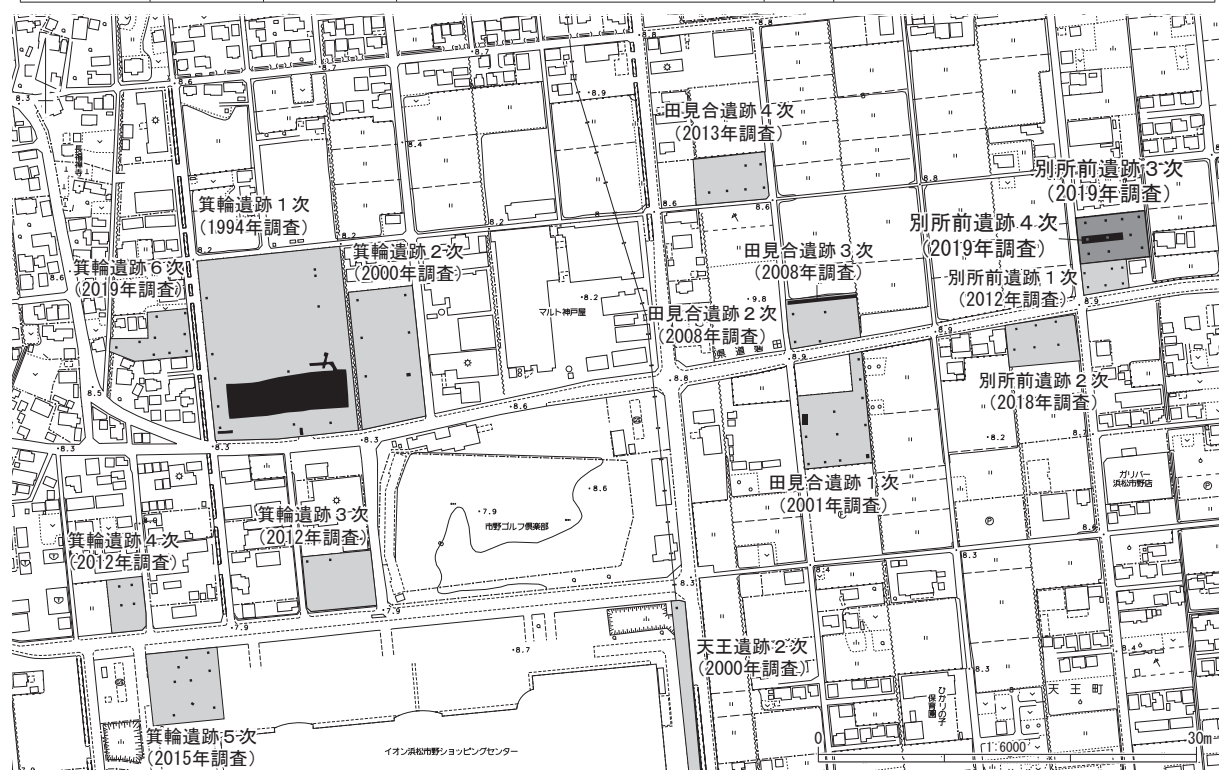


Fig.4 別所前遺跡周辺の主な発掘調査地点

第2章 調査成果

1 確認調査（3次調査）の成果

（1）概要

対象地内の遺跡の埋没状況を確認するため、4次調査に先立ち確認調査（3次調査）を、開発計画に合わせて10箇所（2m×2m）の調査坑を設定して行った。調査の結果、対象地の西側において、弥生時代の遺物包含層に加えて、土坑等の遺構を検出したが、東側では出土した遺物はごく僅かであり、安定した遺物包含層は確認されず、遺構も検出されなかった。したがって、調査対象地の西側のみを本発掘調査の必要な範囲と判断した。

（2）基本層位

調査対象地内におけるすべての調査坑において、おおむね近似した土層堆積状況を確認した。確認した土層堆積状況は次のとおりである。Ⅰ層：盛土、Ⅱ層：暗灰色～灰色粘土（水田耕作土）、Ⅲ層：灰色～青灰色粘土（中世の遺物包含層）、Ⅳ層：黒灰色粘土（弥生時代後期の遺物包含層）、Ⅴ層：暗灰色粘土・暗灰色シルト、Ⅵ層：灰色シルト、Ⅶ層：灰色砂の順に確認した。Ⅴ層とⅥ層は非常に近似した土質であるが、Ⅵ層の方がややシルト質が強い傾向がみられる。

遺物包含層であるⅢ層は、中世の遺物を包含するが、含まれる遺物量は少量であった。Ⅳ層は弥生時代の遺物包含層である。西側の調査坑（調査坑1・2・5・6・8・9）では比較的多くの遺物が含まれるが、東側の調査坑（調査坑3・4・7・10）ではごく僅かに遺物を含むのみであり、安定した包含層は確認されなかった。

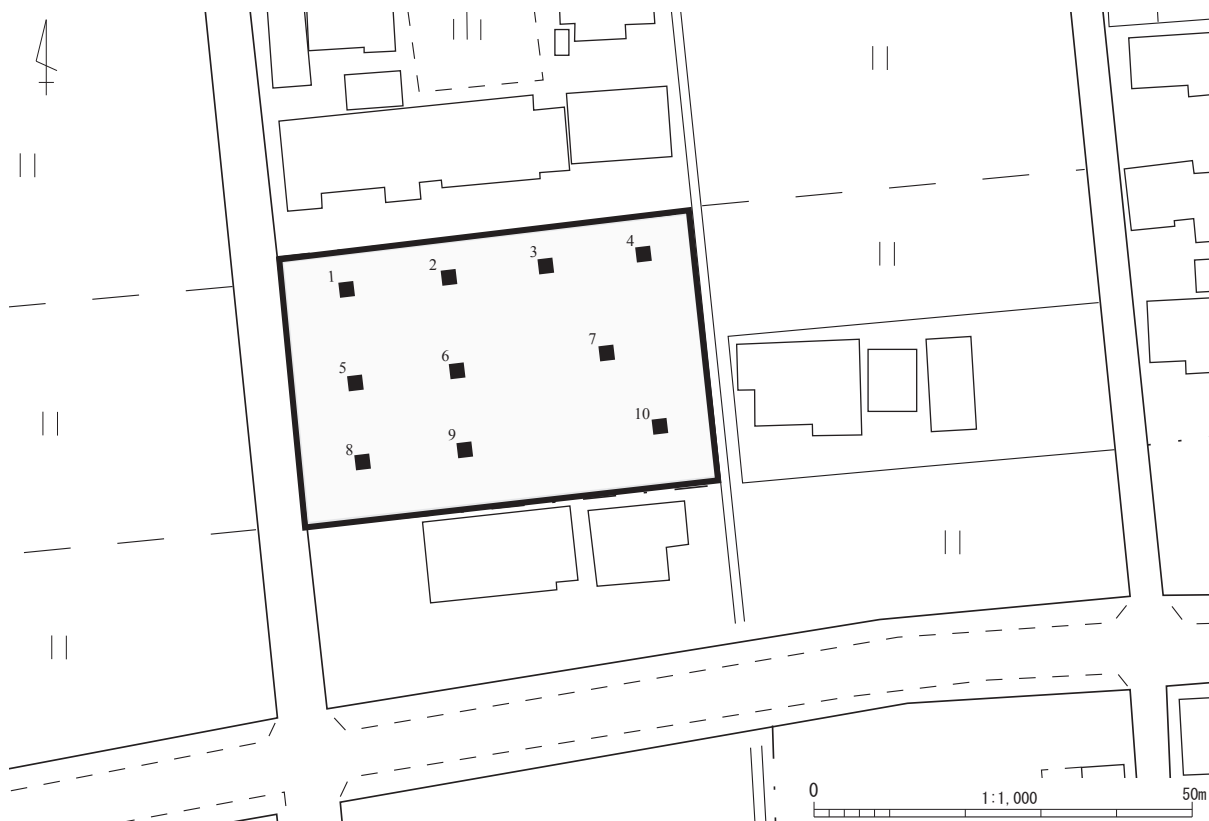


Fig.5 確認調査（3次調査）調査坑配置図

(3) 検出遺構

調査坑2において土坑1基、調査坑6において小穴1基を検出した。調査坑2において検出した土坑は、調査区外へと及んでいたため全容は不明であるが、直径約1.1m、Ⅶ層から掘りこまれていることを確認した。なお、土坑内からは弥生時代後期の土器が出土した。調査坑6において検出した小穴は、湧水の影響により、平面検出には至らなかったが、土層断面においてⅥ層から掘りこまれていることを確認した。遺物を伴わないが、検出された層位から弥生時代後期の遺構と考えられる。

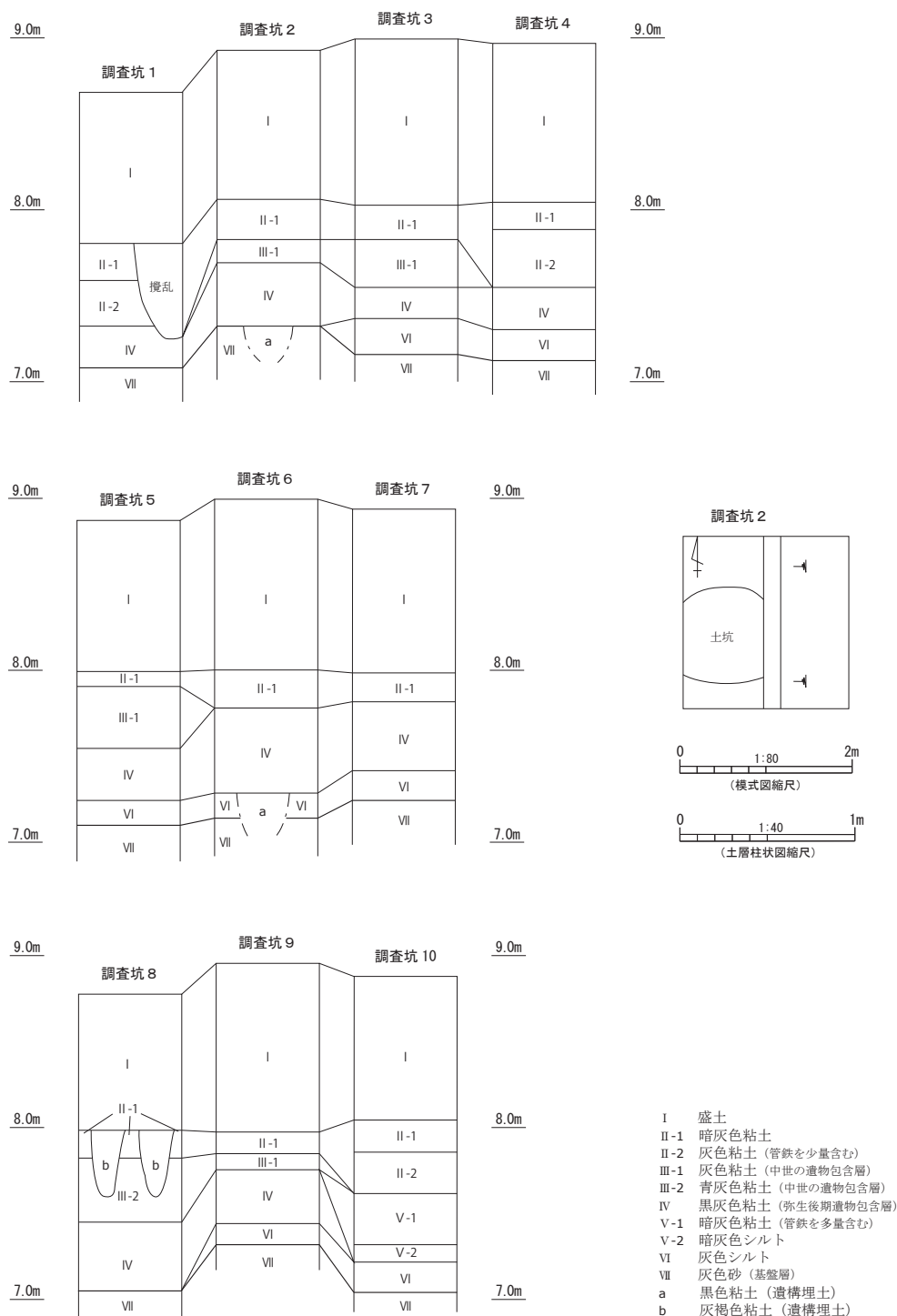


Fig. 6 確認調査 (3 次調査) における土層柱状図及び調査坑 2 平面模式図

(4) 出土遺物

3次調査において出土した主な出土遺物を Fig.7 に示した。1～6 は弥生土器、7・8 は中世陶器である。1～3 は、甕の口縁部で、1 は口径 29.0cm、2 は口径 30.0cm とやや大型の製品である。いずれも口縁部がく字状に外反し、口縁端部には刺突が施される。4・5 は甕の脚台部である。4 は内外面ともにハケ調整が認められ、体部と脚台部の接合部には粘土帯が巡る。5・6 は調査坑 2 で検出した土坑内から出土したものである。5 は内外面にハケ調整が施されている。6 は壺の底部である。底径は 6.0cm で内外面にミガキ調整が認められる。1～6 の帰属時期は、いずれも弥生時代後期のものと捉えられる。7 は山茶碗の底部である。底径 6.4cm、高台部の底面には靱殻痕が見られる。8 は山皿である。口径 8.4cm で底部には糸切り調整痕が見られる。7・8 の帰属時期は、いずれも鎌倉時代のものと捉えられる。

(5) 小結

3次調査では、調査対象地の西側において遺構・遺物を確認した。調査対象地の西側では、安定した弥生時代後期の遺物包含層に加えて、同時期の遺物を含む土坑及び小穴を検出した。一方、調査対象地の東側では出土した遺物は小破片がごく僅かであり、安定した遺物包含層は確認されず、遺構も全く検出されなかった。

これまでに、対象地の東側で弥生土器が採取されているものの、今回の調査に加えて 1 次調査においても同時期の遺構・遺物が検出されていることから、遺跡の中心は対象地の南西から西側にかけて展開していると考えられる。

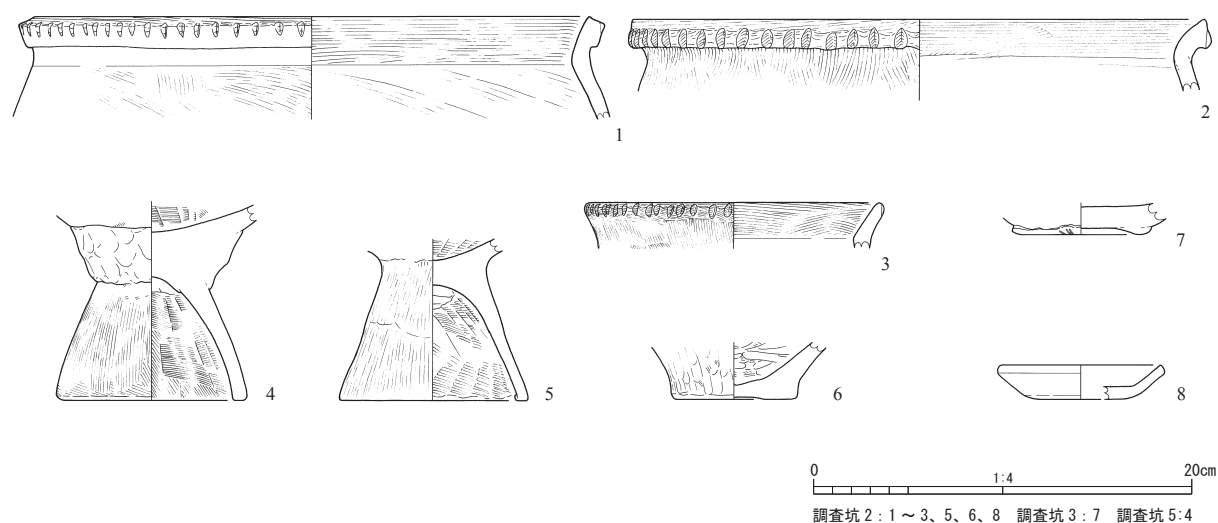


Fig. 7 確認調査 (3 次調査) 出土遺物

Tab. 2 確認調査 (3 次調査) における出土遺物観察表

Fig.	No.	調査坑	遺構 / 層位	種別	細別	残存%	反転	器径 cm	器高 cm	口径 cm	底径 cm	色調	その他
7	1	2	IV層	弥生土器	甕	10% 以下	反			29.0		にぶい黄橙	外面スス付着
7	2	2	IV層	弥生土器	甕	10% 以下	反			30.0		にぶい黄橙	外面スス付着
7	3	2	IV層	弥生土器	甕	10% 以下	反			15.2		灰黄	
7	4	5	IV層	弥生土器	甕	10%					9.5	にぶい黄橙	
7	5	2	土坑	弥生土器	甕	20%	一部反転				9.7	灰黄	
7	6	2	土坑	弥生土器	壺	10%					6.0	にぶい黄橙	
7	7	3	III層	中世陶器	山茶碗	30%					6.4	灰	
7	8	2	III層	中世陶器	山皿	30%	反				11.0	灰	

2 本発掘調査（4次調査）の成果

（1）調査の概要

今回の発掘調査は、3次調査の結果を受けて、将来的に公道へ移管される道路整備区域の一部を対象に実施した。調査対象面積は、210 m²である。調査区は、新設予定の道路の形状に合わせて、東西に細長い形状に設定した。調査対象地の北側では、建物基礎と思われる攪乱の影響を顕著に受けている箇所も見られたが、その他の部分においてはおおむね良好に遺跡が残っており、弥生時代後期の遺構・遺物を数多く確認した。

（2）基本層位

調査対象地内における基本層位は次のとおりである。上層から、Ⅰ層：盛土、Ⅱ層：灰色系粘土（水田耕作土）、Ⅲ層：灰褐色粘土（遺物包含層）、Ⅳ層：暗灰色～褐灰色系粘土（遺物包含層）、Ⅴ層：暗灰色～褐灰色系粘土、Ⅵ層：灰色シルトの順である。

Ⅲ層とⅣ層が遺物包含層である。Ⅲ層は、山茶碗や山皿の破片を含むことから、中世の遺物包含層と捉えられるが、含まれる遺物量はごく僅かである。Ⅳ層は、弥生時代後期の遺物包含層である。Ⅲ層と比較するとⅣ層は圧倒的に多くの遺物を含んでいる。

遺構は、Ⅴ層から掘りこまれているものが主体であるが、Ⅵ層から掘りこまれているものも確認された。したがって、本来はⅤ層上面にて遺構検出を行うべきであるが、Ⅴ層はⅣ層と比べてやや砂質が強い傾向が見られるものの、非常に近似した土質であるため、厳密に分けることは困難であった。そのため、Ⅵ層上面において、遺構の検出を行った。

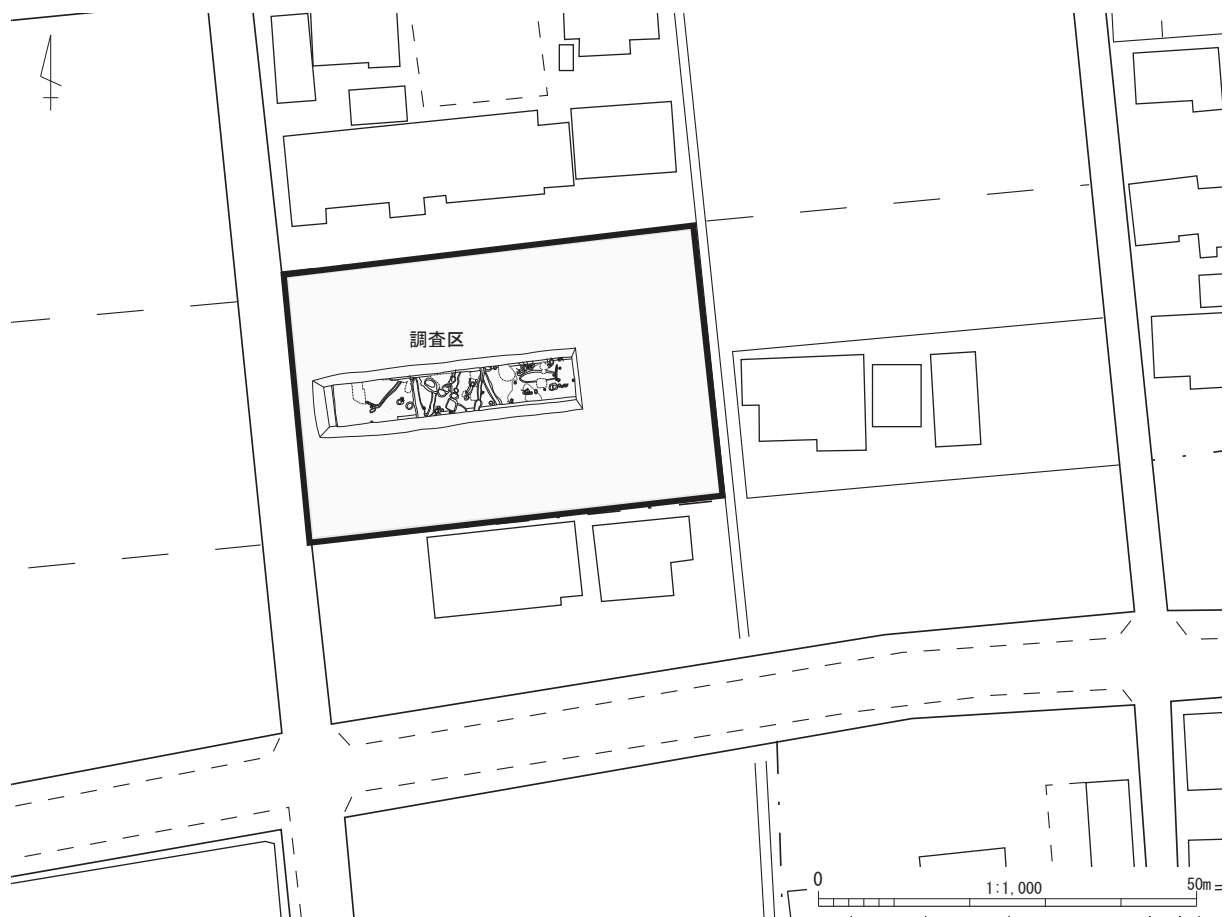


Fig. 8 調査区配置図

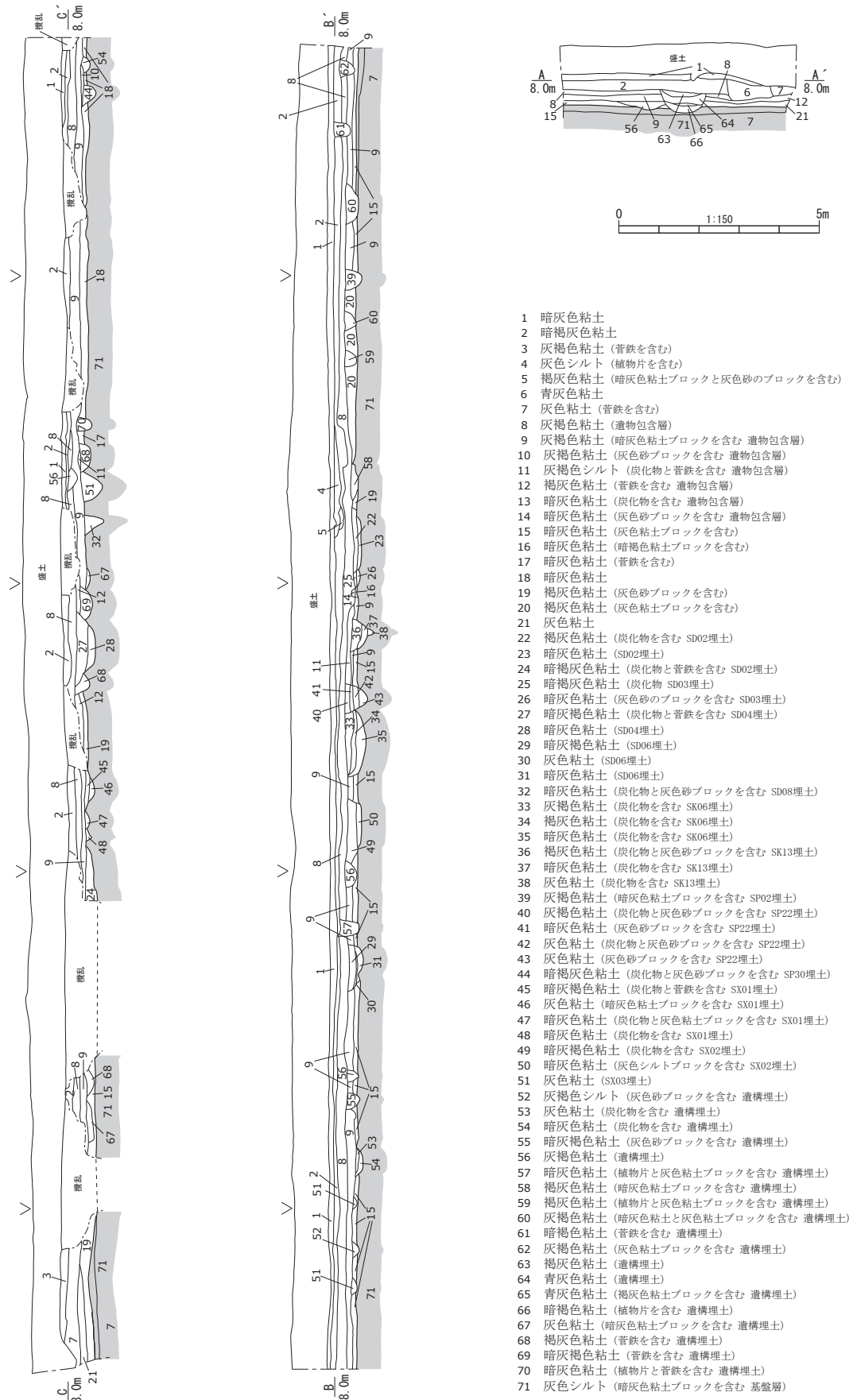


Fig. 10 調査区土層断面図

(3) 検出遺構

検出遺構の概要 調査対象地の中央部を中心に遺構を検出した。検出した遺構は、溝 9 条、土坑 19 基、小穴 34 基、性格不明遺構 3 基である。遺構はⅤ層から掘り込まれているものが主体であるが、一部その他の層位からも掘り込まれていた。土層断面を確認したところ、遺物包含層であるⅣ層から掘り込まれた遺構も一定数確認できたが、Ⅳ層とⅤ層で確認した遺構に明確な時期差は認められなかった。遺構内から出土した土器は破片が多く、全体の形状がわかるものは少ないが、遺構の帰属時期は、弥生時代後期が中心と考えられる。

SD01 (Fig.11) 調査区の西側で検出し溝である。SD01 の両端は、いずれも攪乱の影響を受けているため本来の全長は不明であるが、検出面で幅約 0.4m、深さ約 0.2m、全長約 6.5m を測る。

SD01 出土遺物 (Fig.13) SD01 からの出土遺物は少なく、また細片のため図化できた遺物は 1 のみであった。1 は甕の肩部である。ハケ調整後、斜線文が施されている。遺構の時期は、出土遺物は限られているものの、出土遺物と検出面から弥生時代後期のものと考えられる。

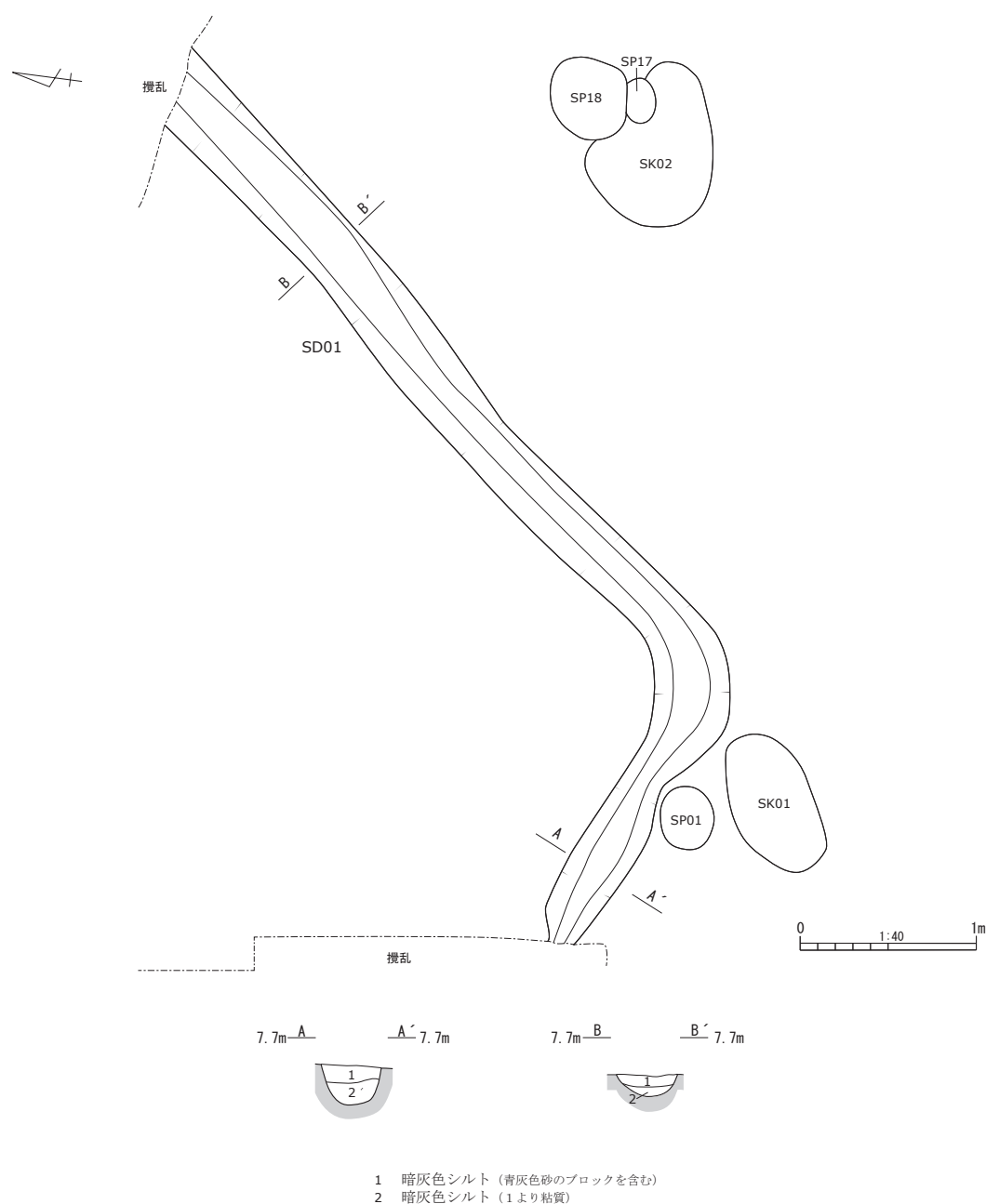


Fig. 11 SD01 詳細図

SD02 (Fig.12) 調査区の中央やや西よりで検出した南北方向に延びる溝である。SD02 の両端は、いずれも調査区外へと延びているため本来の全長は不明であるが、検出面で幅約 1.1m、深さ約 0.25m、全長約 5.4m を測る。埋土は、褐灰色粘土（上層）と暗灰色粘土（下層）の 2 層に分かれる。出土した遺物の大半は、埋土上層の褐灰色粘土内から出土していることから、SD02 の廃絶時と同時期に遺物を廃棄したと考えられる。なお、SD02 の断面形状は箱型を呈しており、環濠の可能性が推察される。

SD02 出土遺物 (Fig.13・14) 2～40 は SD02 から出土した遺物である。Fig.13 に壺と高坏、Fig.14 に甕を示した。

2～21 は壺である。口縁部の形態は図化できたものは限られるが、外反口縁のものが認められる。肩部には、比較的幅の狭い横線文を主体とし、波状文（4・7・11・12・13）、列点文（6・9・11）・浮文（7・12・13）・羽状文（5・14）・山形文（14）を施すものが見られる。底部は外面をミガキ、内面をハケで調整されている。なお、5・9 は頸部の屈曲が弱くゆるやかに立ち上がっており、菊川式の搬入品もしくは菊川式の影響を受けたものと考えられる。

22 と 23 は高坏である。22 は比較的浅い碗形の坏部を呈しており、内外面ともにミガキ調整が施されている。22 は脚部である。外面はハケによる調整後ミガキ、内面には板ナデによる調整がみられ、3 方向にスカシが施されている。

24～40 は甕である。口縁部は、直線的に開くもの(28)や屈曲が弱くゆるやかに外反するもの(30)も見られるが、く字状に屈曲するものが主体である。また、口縁部にはいずれも刺突が施されている。胴部外面はハケ調整、内面はハケ、板ナデ、オサエ調整が見られる。脚部外面はハケ調整、内面はハケ及び板ナデ調整が見られる。

SD02 は、出土した高坏や壺の文様の特徴等から、弥生時代後期前半（山中式新相段階）の遺構と捉えられる。

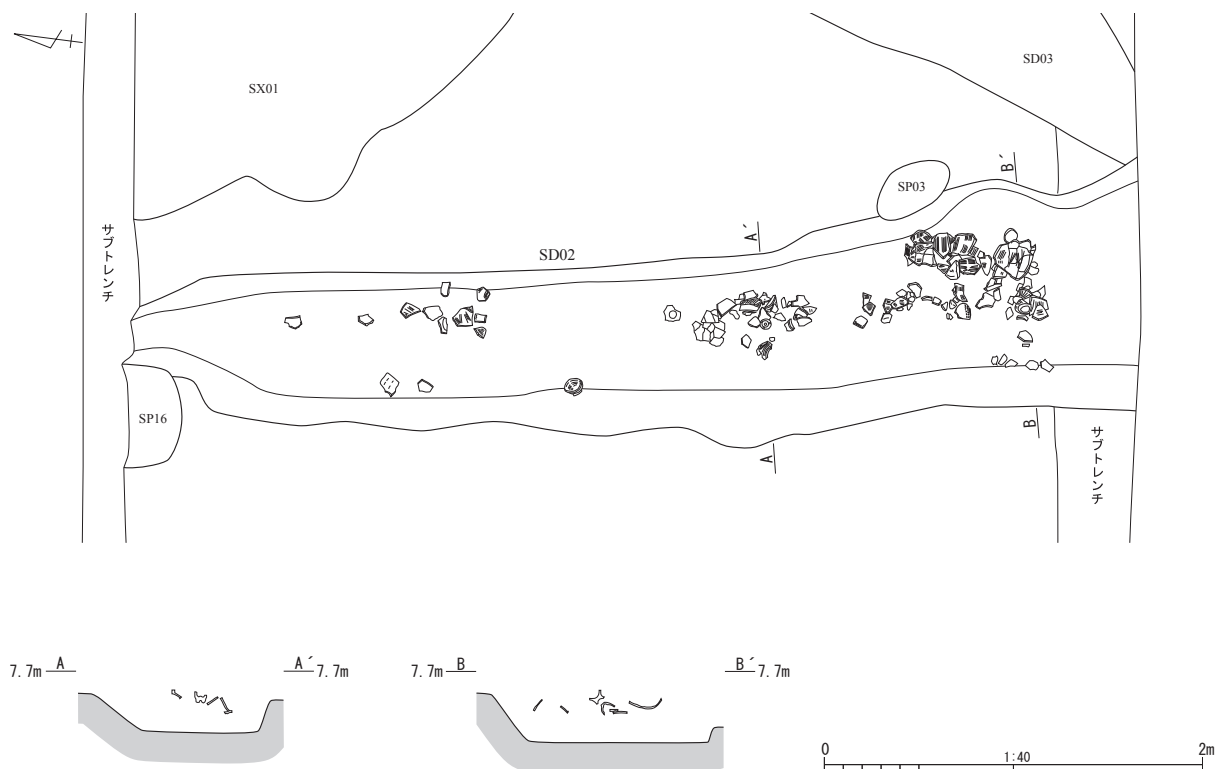


Fig. 12 SD02 詳細図

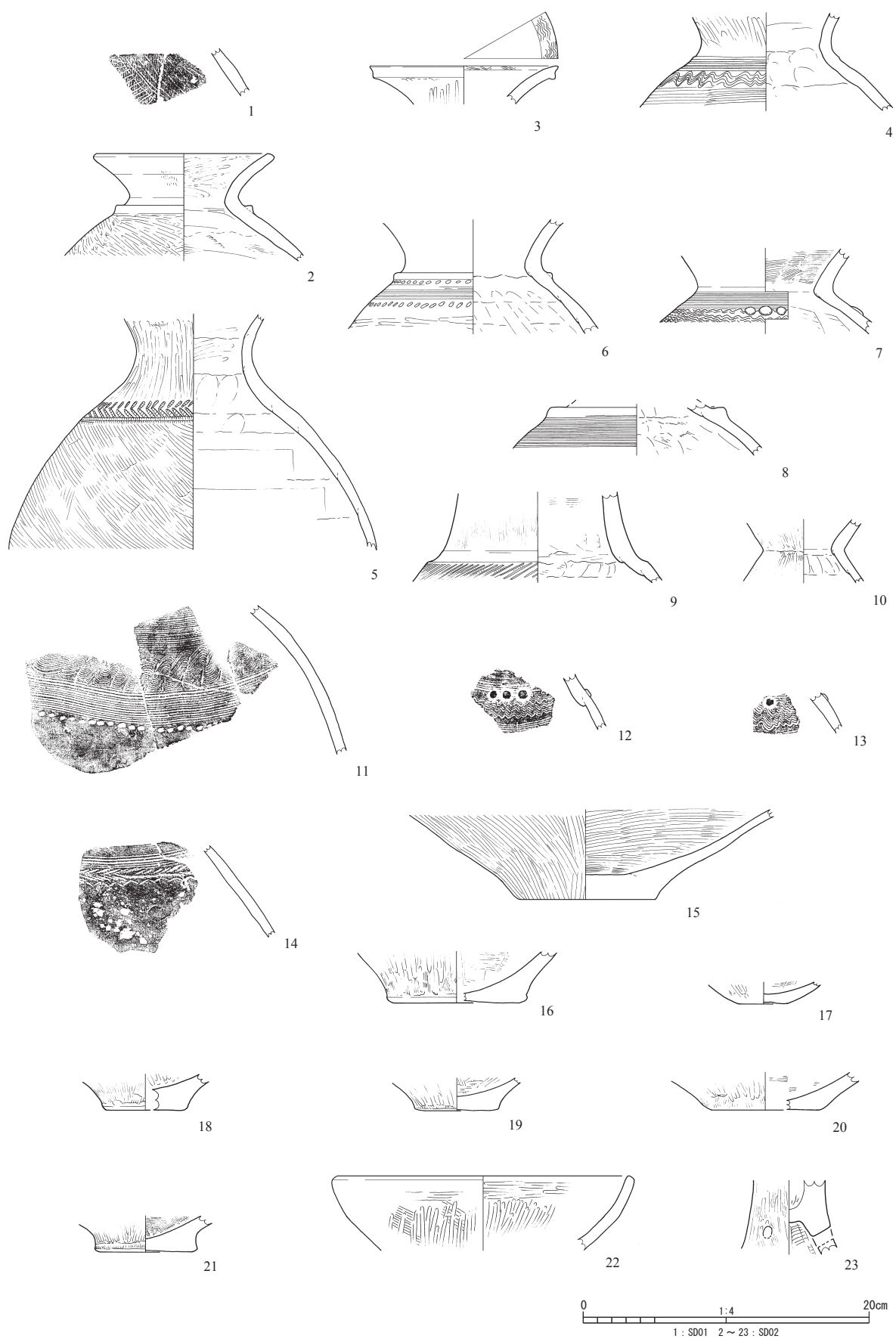


Fig. 13 SD01・SD02 出土遺物 (1)

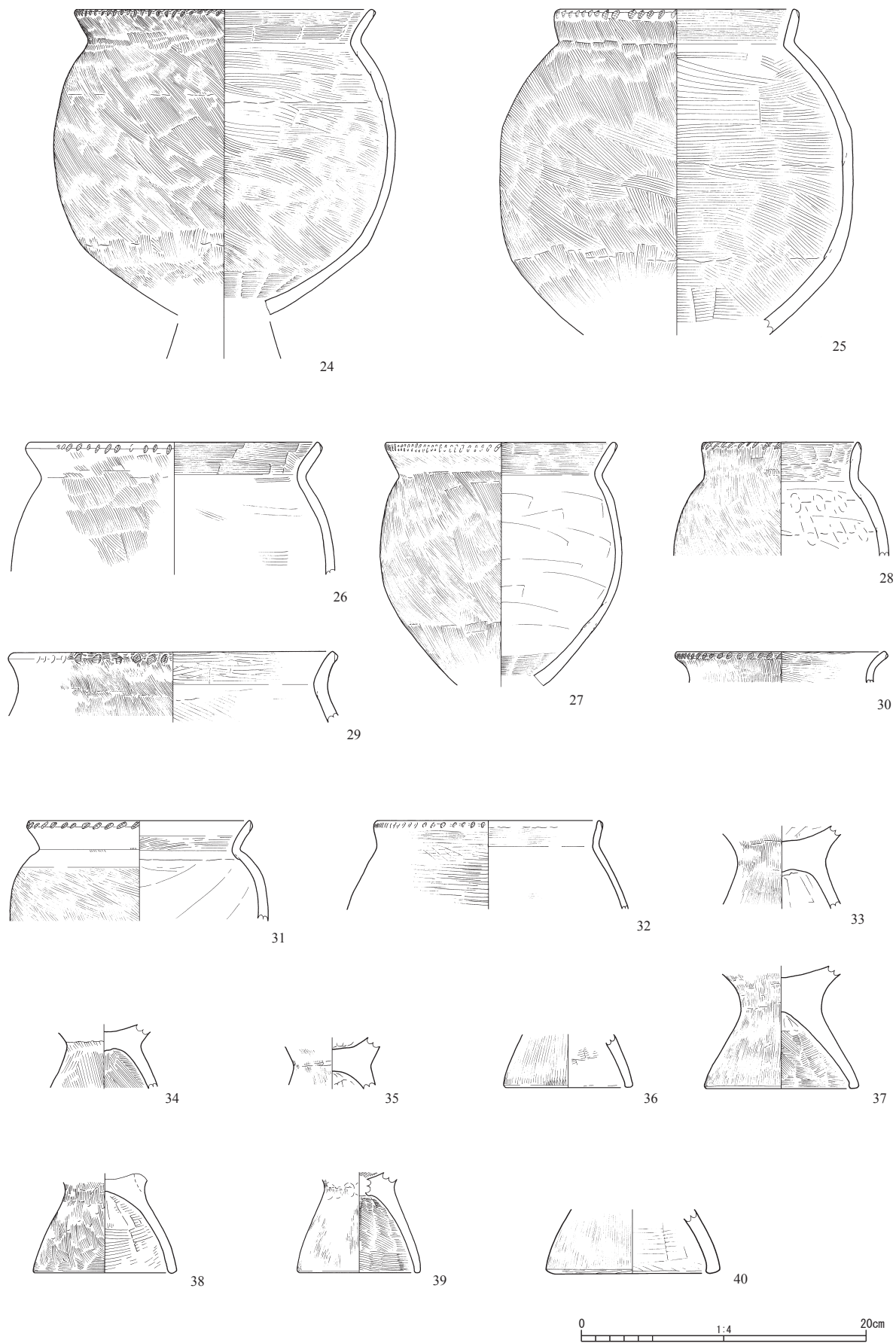


Fig. 14 SD02 出土遺物 (2)

SD03 (Fig.15) 調査区の中央やや西よりで検出した南北方向に延びる溝である。SD03 の南端は調査区外へと延びており、北端は SX01 によって切られているため、本来の規模や遺構の性格は不明であるが、検出面で確認した規模は幅約 0.7m、深さ約 0.2m、全長約 3.2m を測る。SD03 の土層堆積状況を南壁の土層断面において確認したところ、西側に隣接して南北方向に延びる SD02 によって切られていることが確認された。なお、検出面はV層である。埋土は2層に分層できる。上層は暗褐色灰色粘土（炭化物を含む）、下層は暗灰色粘土（灰色砂ブロックを含む）である。遺物は、上層にあたる暗褐色灰色粘土内を中心に含まれていることから、SD03 の廃絶した時期と同時期に遺物を廃棄したと考えられる。なお、遺

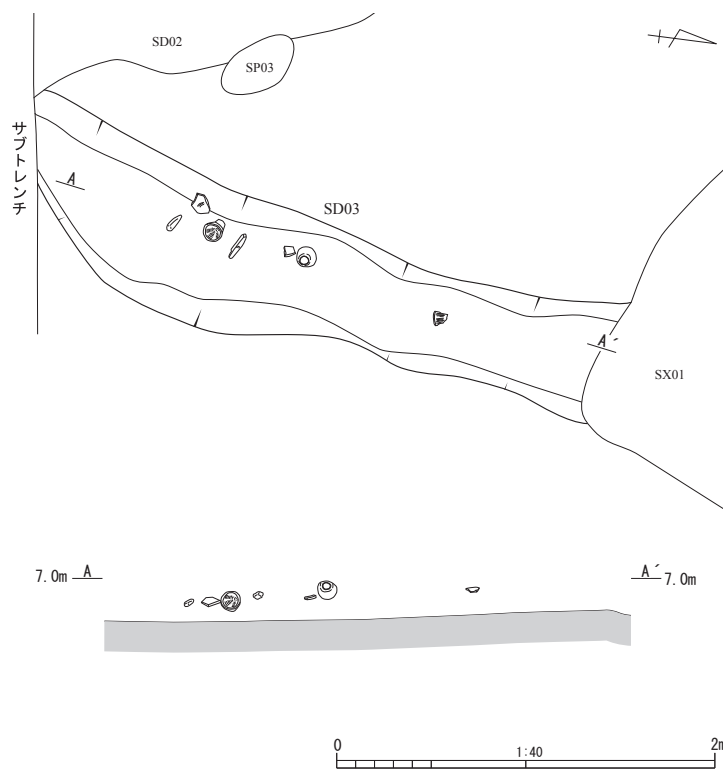


Fig. 15 SD03 詳細図

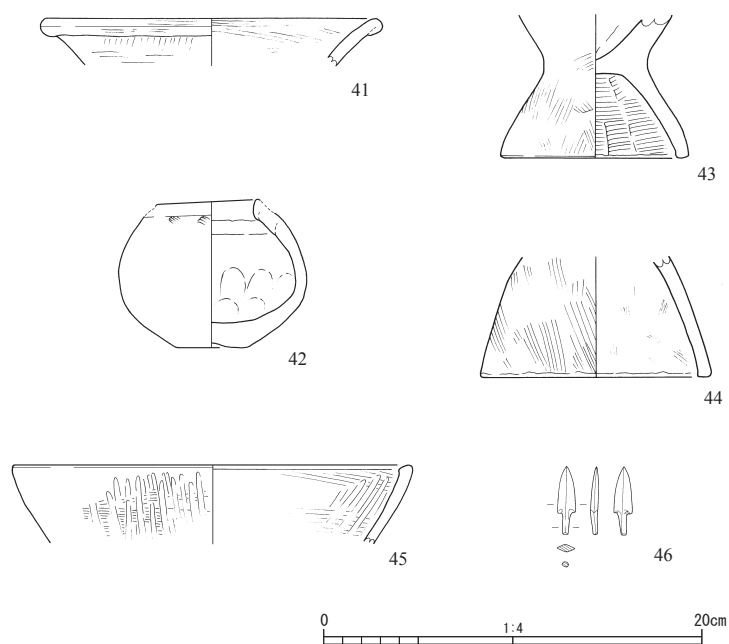


Fig. 16 SD03 出土遺物

物は SD03 の中央部から南側付近を中心に出土した。出土した土器は、完形となる個体はなく、破片が大半を占めることから、図化できた遺物は限られている。特筆すべき遺物として、土器に加えて完形の銅鏃が 1 点出土した。

SD03 出土遺物 (Fig.16) Fig.16 に SD03 から出土した遺物を示した。41・42 は壺である。41 の口縁部は外反する形状を呈しており、口縁端部は外側に折り返されている。内外面ともにハケ調整が認められる。42 は小型の壺である。頸部から口縁部にかけて剥離して失われているため、本来の口縁形態は不明である。外面は僅かにハケ調整が見られるが、摩滅が顕著である。内面は底部に指オサエ調整が認められる。43・44 は甕の脚台部である。一部、摩滅により調整が不鮮明ではあるが、内外面ともにハケ調整が施されている。45 は高坏である。小破片であるため、本来の形状は断定できないが、坏部がやや浅い形状の碗型坏部高坏と考えられる。口径 21.0cm、内外面ともにミガキ調整が見られる。46 は銅鏃である。長さ 3.6cm、幅 1.0cm、重さ 3.6g である。鏃身形態は、柳葉を呈しており、主軸方向に鑄がみられる。断面形態は、鏃身はひし形、茎部はやや不整形な円を呈する。

SD03 は、出土した遺物は多くないものの、45に見られるやや浅い形状をした高坏が出土していることから、弥生時代後期前半（山中式新相段階）の遺構と捉えられる。

SD08・SD09 出土遺物 (Fig.17) 47～50にSD08とSD09から出土した遺物を示した。49のみSD09から出土した遺物であり、その他はSD08から出土したものである。47・48は菊川式の壺である。47は外反口縁壺である。外面はハケ調整後ミガキ調整、内面はミガキ調整が認められる。また、外面頸部と口唇部に縄文が施されている。48は壺の頸部であり、外面に縄文が施されている。49は壺の底部である。外面はミガキ調整、内面はハケ調整が認められる。50は甕の脚台部である。外面はハケ調整、内面はハケとオサエによる調整が認められる。

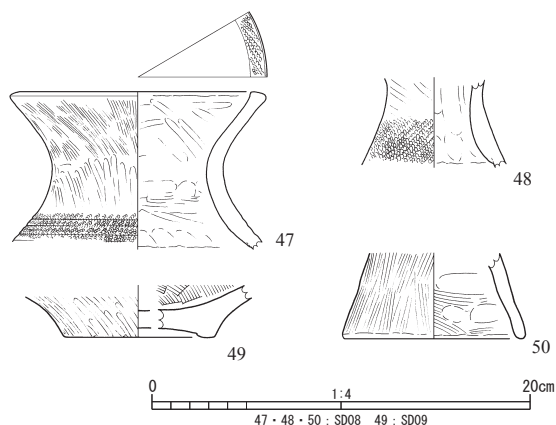


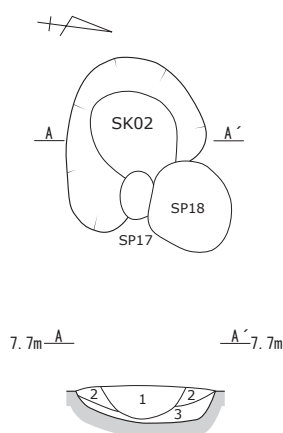
Fig. 17 SD08・SD09 出土遺物

SD08は出土遺物から、弥生時代後期の遺構と捉えられる。また、SD09の出土遺物は49の1点に限られるが、出土遺物から弥生時代後期の遺構と考えられる。

SK02 (Fig.18) 調査区の西側で検出した土坑である。SK02は北東側の一部をSP17とSP18により切られているため、正確な形状は不明であるが、規模は長辺約1m、短辺約0.6m、検出面での深さは約0.2mであり、歪な楕円形を呈すると考えられる。埋土は3層に分層できる。上層より1層：暗灰色シルト（炭化物和灰色砂ブロックを含む）、2層：暗灰色シルト（灰色砂ブロックを含む）、3層：灰色砂（暗灰色シルトブロックを含む）の順である。3層は初期堆積層と考えられる。1・2層の土層堆積状況から、人為的に埋められたと考えられる。

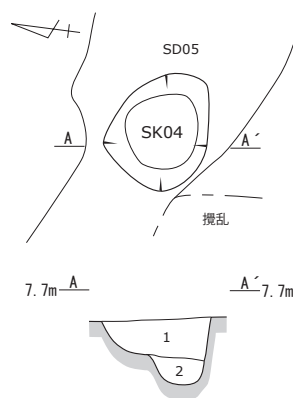
SK02 出土遺物 (Fig.20) 51と52はSK02から出土した遺物である。出土した遺物は小片が多く、図化できた遺物は2点のみであった。51は壺の底部である。内面及び外面ともにハケ調整が認められる。52は甕の脚台部である。内面及び外面ともにハケ調整が認められる。

SK02から出土した遺物は限られているが、出土遺物から弥生時代後期の遺構と考えられる。



SK02 土層断面図

- 1 暗灰色シルト（少量の炭化物和灰色砂のブロックを含む）
- 2 暗灰色シルト（灰色砂のブロックを含む）
- 3 灰色砂（暗灰色シルトのブロックを含む）



SK04 土層断面図

- 1 暗灰色粘土（灰色砂のブロックを含む）
- 2 黒褐色粘土

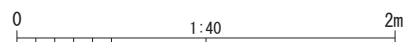


Fig. 18 SK02・SK04 詳細図

SK04 (Fig.18) 調査区の中央付近で検出した土坑である。SK04 は SD05 の廃絶後に新たに掘りこまれて形成されている。SK04 の規模は長辺 0.65m、短辺 0.55m、検出面での深さは 0.45m であり、楕円形を呈する。埋土は 2 層に分層できる。上層は暗灰色粘土 (灰色砂ブロックを含む)、下層は黒褐色粘土である。

SK04 から出土した遺物はいずれも小破片であり、図化できたものはなかったが、弥生時代後期の遺物が出土した。

SP23・SP24 (Fig.19) いずれも調査区の中央付近で検出した小穴である。SP23 は西側の一部、SP24 は西側のおおむね半分が攪乱の影響を受けていた。SP23 の規模は長辺 0.7m、短辺 0.55m、検出面での深さは 0.3m である。SP24 は攪乱の影響を受けているため、詳細は不明であるが、直径 0.7m 程の規模と考えられる。なお、検出面での深さは 0.3m である。土層断面を確認したところ、SP23 が SP24 を切って掘りこまれていることを確認した。埋土は SP23・SP24 とともに、2 層に分層できる。SP23 は上層が暗灰色粘土、下層が黒褐色粘土、SP24 は上層が暗灰色粘土 (灰色砂ブロックを含む)、下層が黒褐色粘土である。

出土遺物は、SP24 からのみ出土し、SP23 からは確認されなかった。SP24 から出土した遺物は、いずれも小破片であり、図化できたものはなかったが、弥生時代後期の遺物が出土した。また、SP23 から遺物は出土していないが、埋土の特徴が SP24 と酷似することから同時期の遺構と考えられる。

土坑・小穴出土遺物 (Fig.20) 出土した遺物は小破片のものが多く、土坑及び小穴から出土した遺物のうち、図化できたものを 53～56 に示した。

53 は SK07 から出土した遺物であり、内湾口縁壺の口縁部である。外面にミガキ調整が施されている。

54 は SP03 から出土した遺物であり、甕の体部と脚台部の接合部である。内面・外面ともにハケ調整が施されており、外面の一部にはハケ調整後にナデ調整が認められる。

55 は SP05 から出土した遺物であり、内湾口縁壺の口縁部である。内面・外面ともにハケ調整後、外面は横方向のミガキ、内面は斜方向のミガキ調整が施されている。

56 は SP34 から出土した遺物であり、折返口縁壺の口縁部である。内外面ともに摩滅が顕著であり、調整痕を確認することはできなかった。

SK07・SP03・SP05・SP34 から出土した遺物は、それぞれ 1 点のみであることから、遺構の帰属時期を決めることは慎重にならざるをえないが、出土した遺物の特徴から、いずれの遺構も弥生時代後期のものと考えられる。

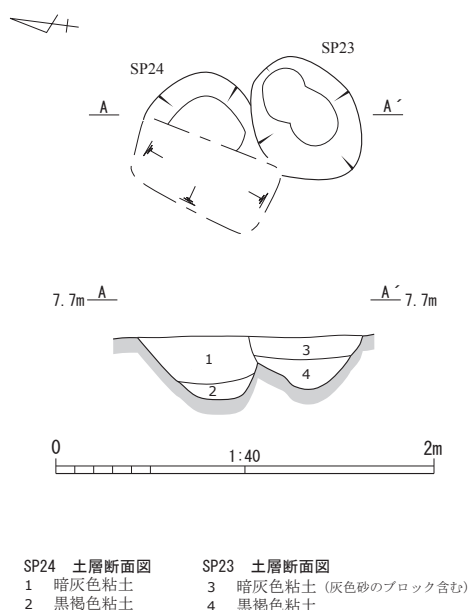


Fig. 19 SP23・SP24 詳細図

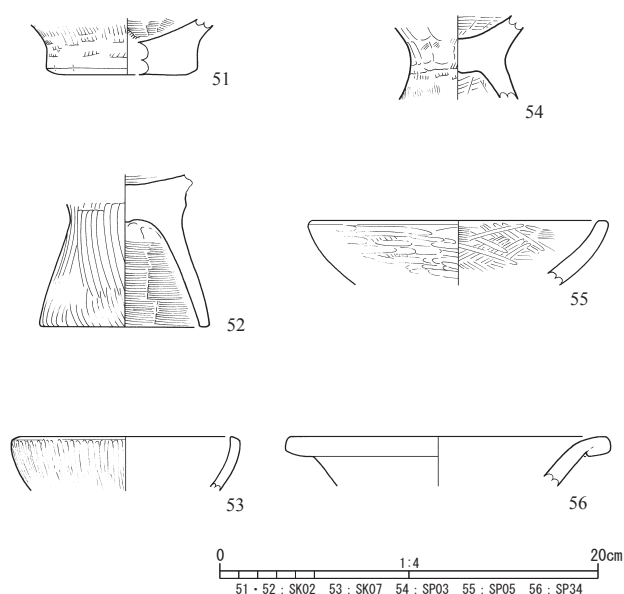


Fig. 20 土坑・小穴出土遺物

SX01 (Fig.21) 調査区の中央西側で検出した不定形土坑である。SX01 は SD03 と SK10 を切って形成されている。攪乱の影響と調査区外へと及んでいるため、詳細な構造は不明であるが、長辺 2.6m、短辺 1.6m 以上の楕円形を呈する。SX01 は中段をもつ構造であるが、最深部の深さは検出面で 0.45m である。埋土は 2 層に分層できる。上層は暗灰色粘土、下層は黒色粘土（炭化物・灰色砂ブロックを含む）である。

SX01 出土遺物 (Fig.23) 57～74 に SX01 から出土した遺物を示した。57～64 は壺である。口縁部形態は 57～59 は折返口縁、60 は外反口縁である。57 は口縁部内面と外面に斜格子文、59 は口縁部内面に波状文が見られる。60 は口縁部の内面と外面にミガキ調整が認められる。61 は内湾口縁細頸壺である。口縁部には 2 段の羽状文とその下には列点文が施されている。65 は鉢である。口縁部が折り返され、外面と内面に斜格子文が施されている。66～71 は甕である。66 は屈曲の弱い口縁形態であり、口縁端部には刺突が見られる。72～74 は高坏である。口縁部形態は、72 は外反し 73 は碗形を呈し、内面と外面にはミガキ調整が認められる。SX01 は、出土した遺物から、弥生時代後期前半（山中式新相段階）の遺構と捉えられる。

SX02 (Fig.21) 調査区の中央東よりで検出した不定形土坑である。SX02 の南端は調査区外へと及んでいるため、詳細な構造は不明だが、長辺 1.4m、短辺 0.9m 以上の規模をもつ楕円形を呈する。なお、検出面での深さは 0.35m である。埋土は 3 層に分層できる。上層より 1 層：暗灰色粘土（灰色砂ブロックを含む）、2 層：黒灰色粘土（灰色砂ブロックを含む）、3 層：黒褐色粘土の順である。出土遺物は、小破片のため図化できなかったが、弥生時代後期と考えられる土器が出土しており、加えて南側の土層断面を確認したところ IV 層から掘りこまれていることから、同時期の遺構と捉えられる。

SX03 (Fig.22) 調査区の中央東よりで検出した不定形土坑である。SX03 は西側を SD08 に切られており、北側は調査区外へと延びているため、詳細な構造は不明であるが、長辺 0.85m、短辺 0.75m 以上の規模をもつ。なお、検出面での深さは 0.5m である。埋土は灰色粘土の単層である。

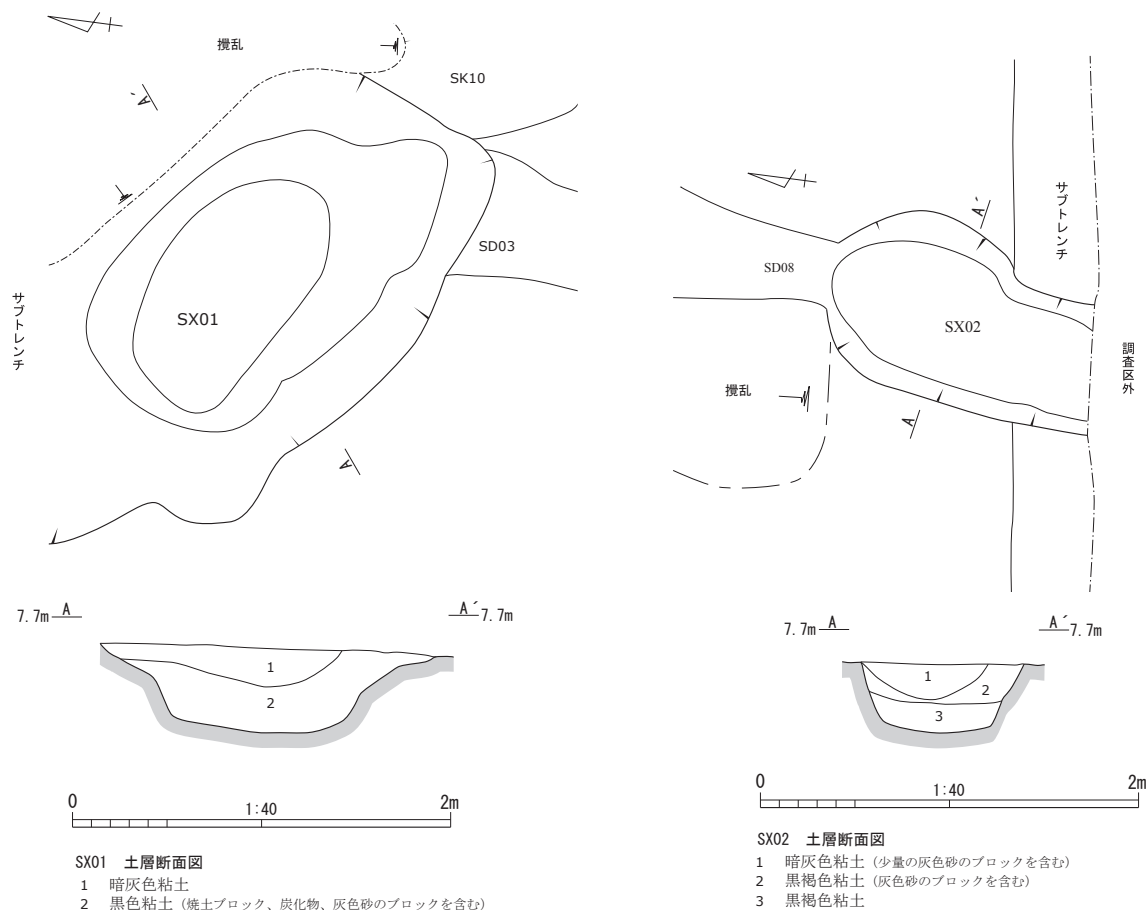


Fig.21 SX01・SX02 詳細図

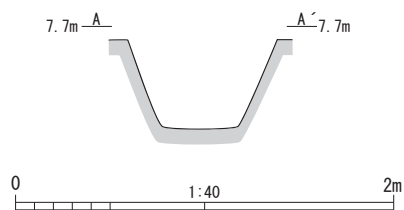
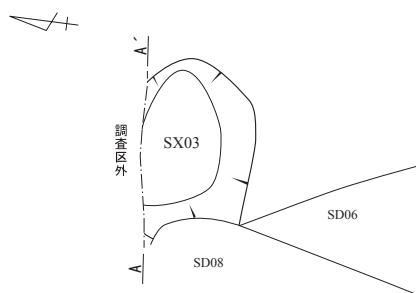


Fig. 22 SX03 詳細図

SX03 出土遺物 (Fig.23) 75～77にSX03から出土した遺物を示した。75と76は壺である。75は口縁部が外反し、端部には刺突文が施されている。76は壺の底部である。内面には板ナデ調整が認められる。77は甕である。内面には板ナデ調整が認められる。

SX03は、出土遺物と北側の土層断面を確認したところV層から掘りこまれていることから、弥生時代後期の遺構と捉えられる。

包含層出土遺物 (Fig.24～27) 78～162に包含層から出土した遺物を示した。出土遺物の多くはIV層から出土したものであるが、一部、III層から出土した遺物も含まれる。

78～113は壺である。78～83は外反口縁壺、84は内湾口縁壺、85・86は複合口縁壺である。78～83は内外面ともにミガキ調整が認められる。84は外面に3段の羽状文が施されている。85は内外面にミガキ調整、86は棒状浮文が認められる。88は肩部に刺突文が施される。89は羽状文と4個1単位とする浮文が施される。

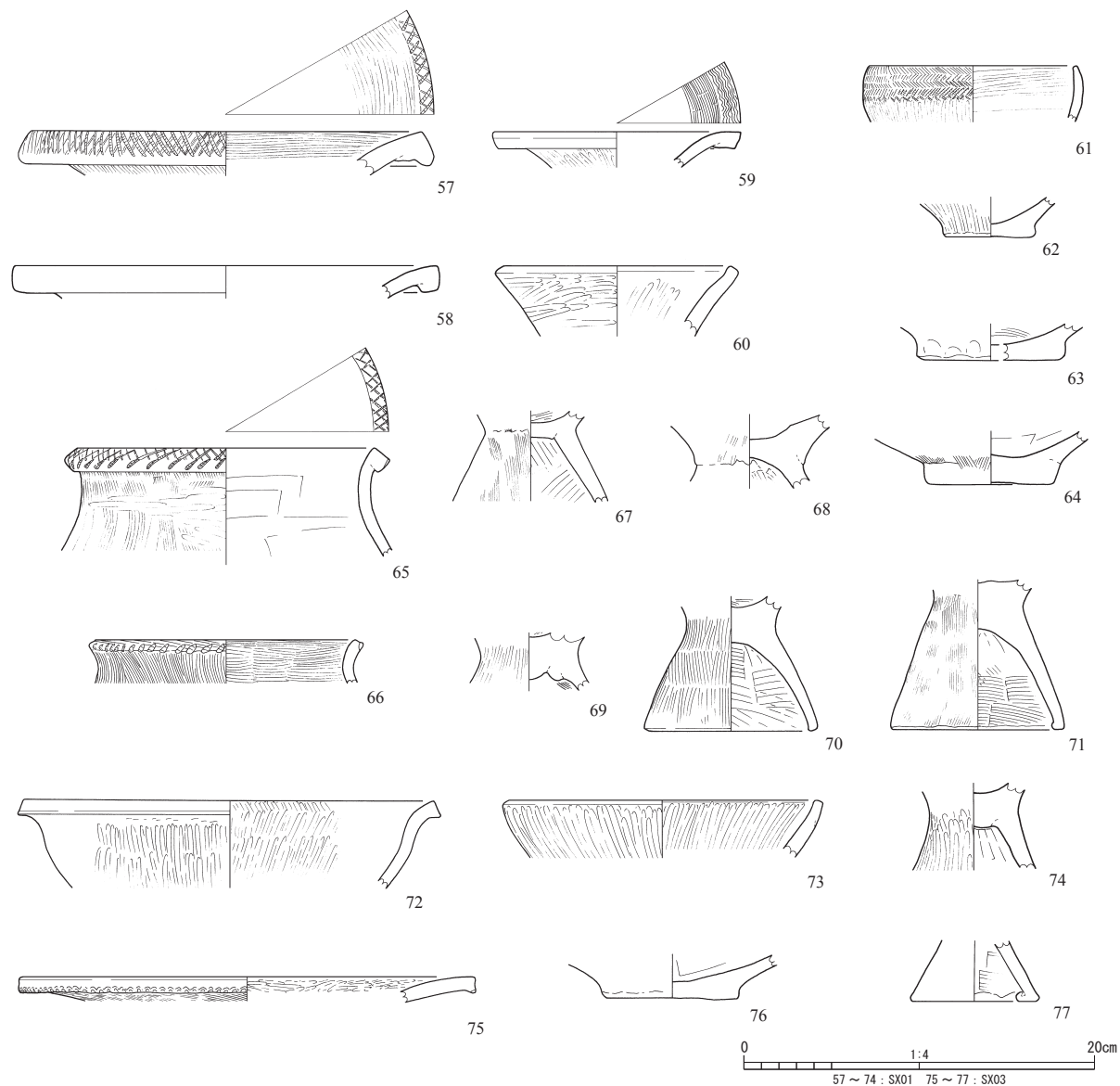


Fig. 23 SX01・03 出土遺物

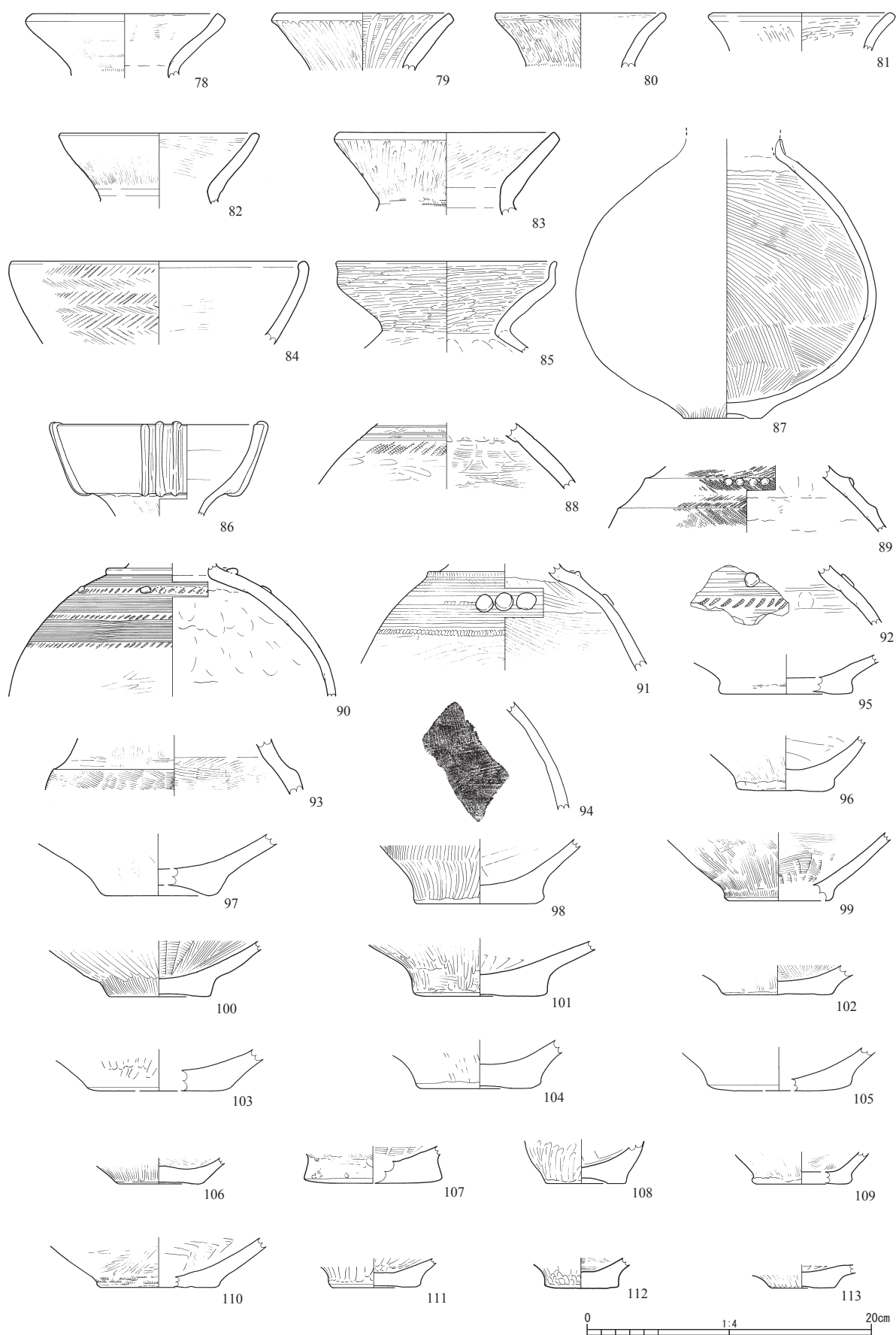
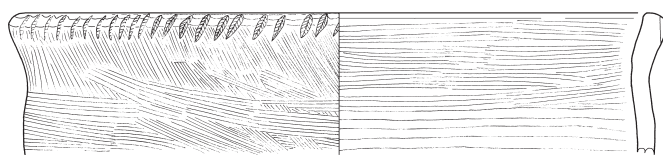


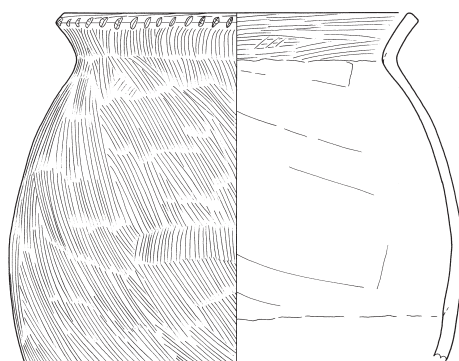
Fig. 24 包含層出土遺物 (1)



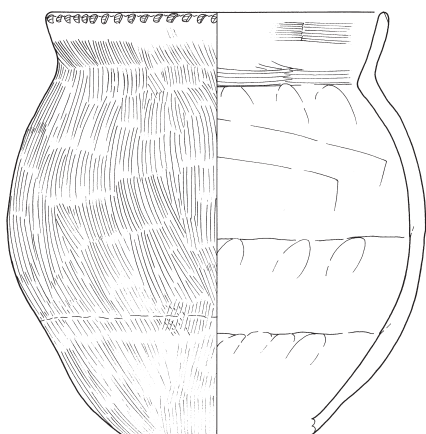
114



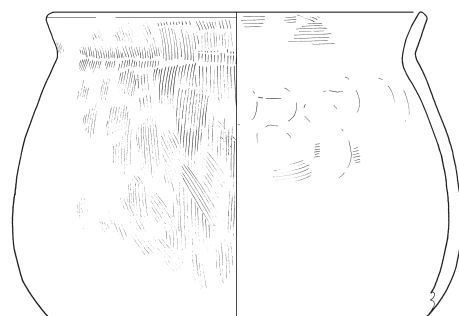
115



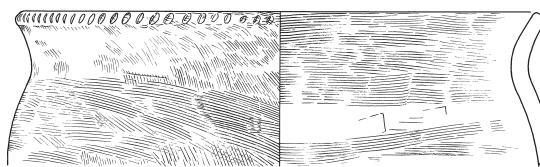
116



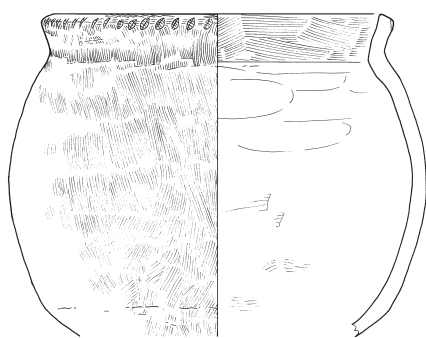
117



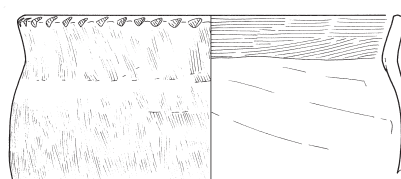
118



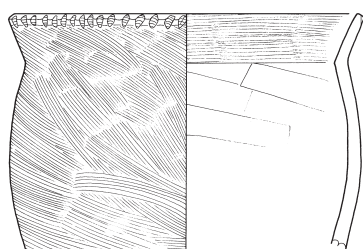
119



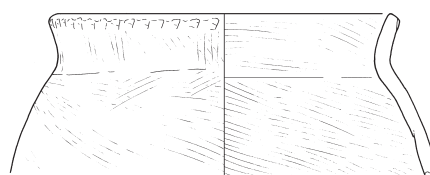
120



121



122



123

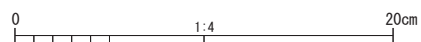


Fig. 25 包含層出土遺物 (2)

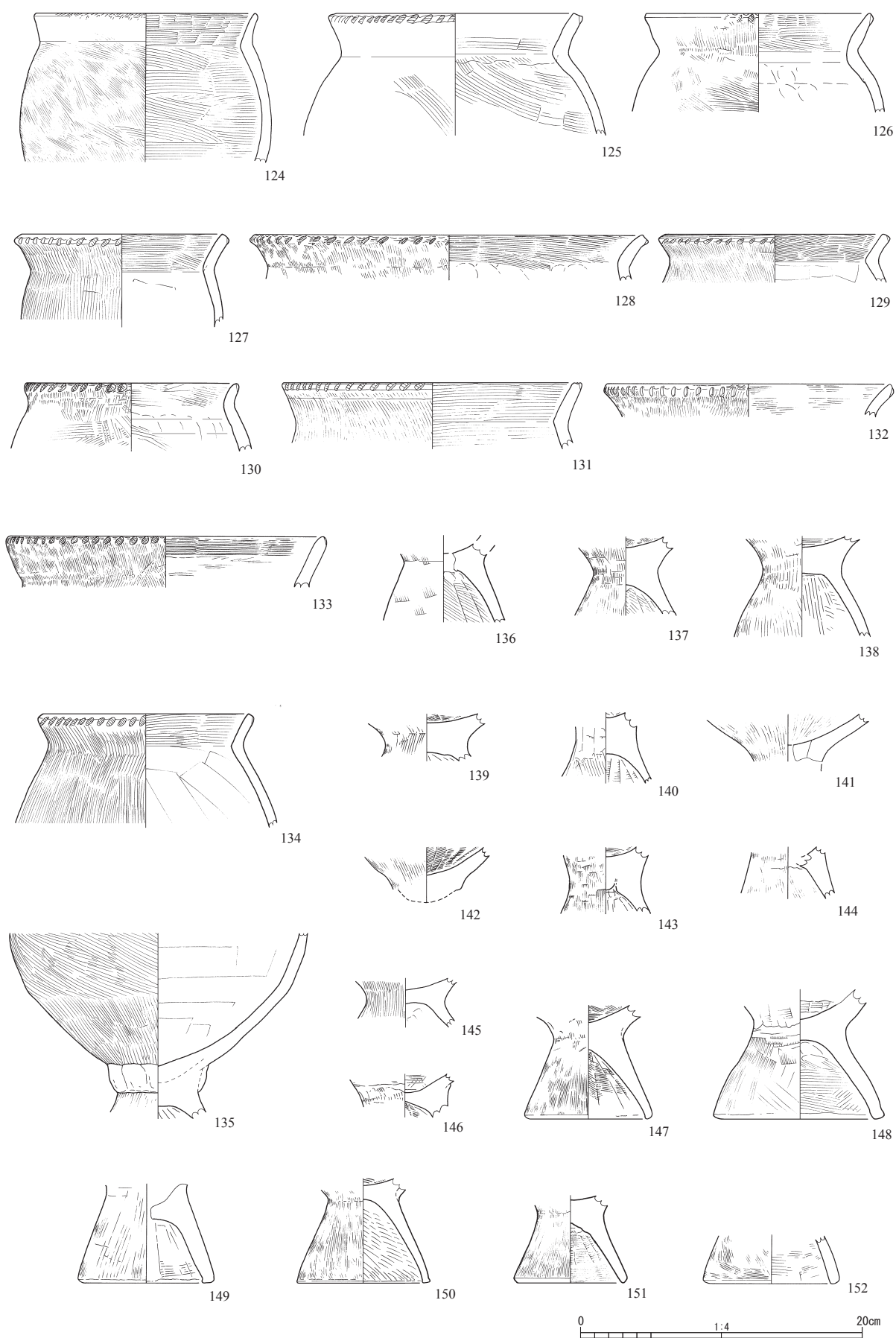


Fig. 26 包含層出土遺物 (3)

90 は横線文と刺突文が3段交互に施され、最上段の刺突文上には浮文が施される。91 は横線文と刺突文が2段交互に施され、最上段の刺突文上には浮文が施される。92 は横線文と刺突文が施され、横線文上には浮文が認められる。94 は絵画土器である。破片のため詳細は不明であるが、縦方向と横方向に線刻が施されている。

114 ～ 152 は甕である。口縁部の形態はく字状に屈曲するものが主体であるが、屈曲の弱い形態のもの(115) も一部認められる。また、口縁端部には刺突を施すものが主体であるが、刺突を施さない個体(118) も認められる。体部と脚部の接合部には粘土帯を施す個体(135) も見られるが、主体となるのは粘土帯を施さない個体である。

153 ～ 159 は高坏である。153・154 は外反坏部高坏である。山中式新相段階のものと考えられる。153 は内外面ともにミガキ調整が認められる。155・156 は内外面ともに丁寧なミガキ調整が施され、脚部にはスカシが認められる。157・158 は外面ミガキ調整、内面ハケ調整が認められる。小型高坏の脚部と考えられる。159 は外面ミガキ調整、内面板ナデ調整及び、スカシが施される。脚部の形態から欠山式段階のものと考えられる。

160 は片口鉢である。内外面ともに丁寧なミガキによる調整が施されており、外面の一部には黒斑が認められる。

161 は直立する口縁をもつ壺である。摩滅が顕著であるが、外面はミガキ調整、内面はオサエとハケ調整が認められる。古墳時代前期のものと考えられる。

162 は灰釉陶器である。底部ヘラケズリ調整が認められる。9世紀代のものと考えられる。

包含層からの出土遺物は、一部古墳時代以降のものも含まれるが、大半は弥生土器である。これらの弥生土器の年代は、出土した高坏などの特徴から山中式新相段階(弥生時代後期前半)の遺物が主体となるが、一部欠山式段階(弥生時代後期後半)の遺物も含まれる。

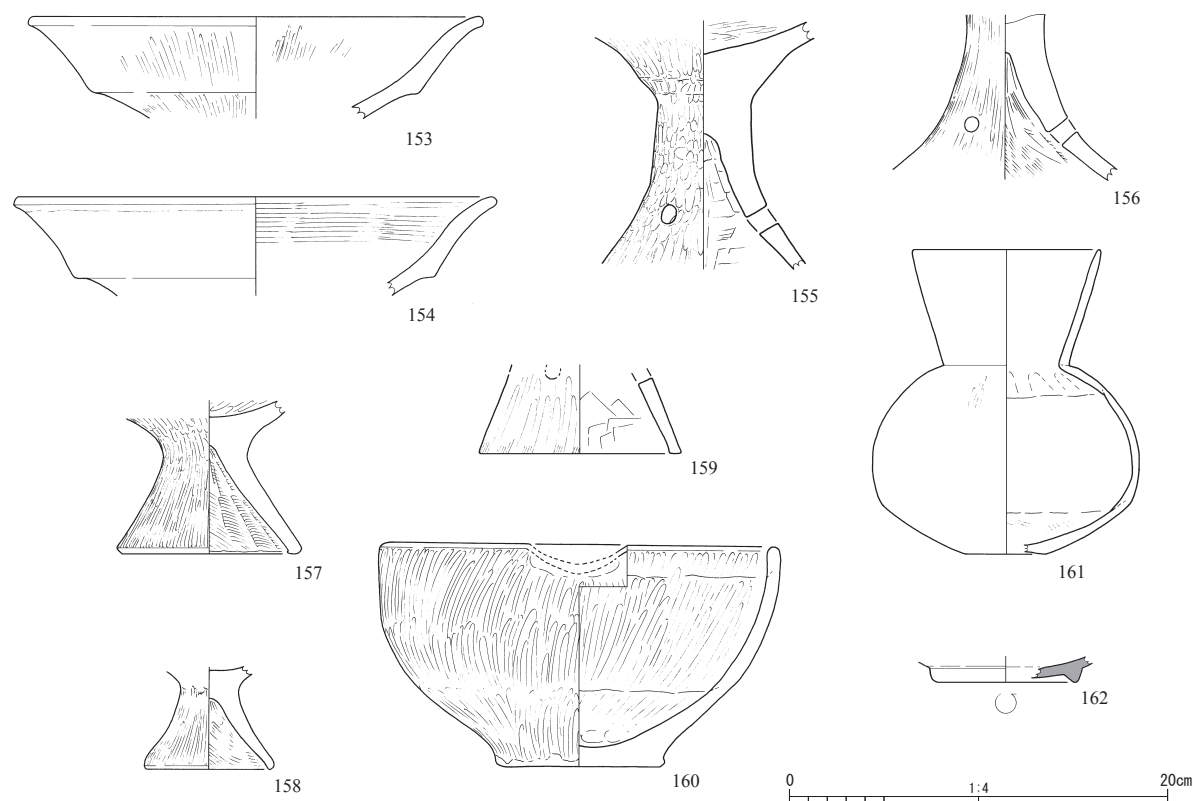


Fig. 27 包含層出土遺物 (4)

第3章 総括

今回の発掘調査の結果、弥生時代後期の遺構・遺物が確認された。遺構・遺物の中心は弥生時代後期前半（山中式）と考えられるが、一部弥生時代後期後半（欠山期）と見られる遺物も確認された。別所前遺跡では、これまでに本格的な発掘調査事例がなく、今回の調査も210 m²程の小規模調査であったが、詳細な遺構の埋没状況が確認されたことは大きな成果と言える。最後に、今回の調査と今後の展望について述べて総括としたい。

1 発掘調査の成果

検出遺構 今回の調査の結果、調査区の中央から東側にかけて多くの遺構が検出された。検出された遺構は、溝・土坑・小穴等が見られる。調査区の中央西側で検出したSD02からは多くの遺物が出土しており、SD02を境に西側では遺構数が極端に減少することから集落の外周に掘削された環濠の可能性が推定される。また、検出された遺構は、重複して掘り込まれているものが多く見られ、遺構内から出土した遺物は、小片のものが多く図化できたものは少ないが、帰属時期は弥生時代後期前半が中心と捉えられる。なお、出土遺物から遺構間の明確な時期差は見いだせないことから、短期間に集落の改変が行われたと考えられる。

出土遺物 出土遺物は、SD02、SD03 及び包含層を中心に弥生時代後期の土器が数多く出土した。出土遺物は、壺と甕が中心であり、高坏やその他の器種は少ない。壺は口縁形態が外反口縁のものが中心であるが、一部内湾口縁や複合口縁のものも認められた。壺の肩部の文様は、比較的幅の狭い横線文を施すものが主体であり、その他に波状文・浮文・羽状文・刺突文が見られる。甕は口縁部に刺突を施すものが中心であり、無刺突の個体は1点のみ認められた。脚部と体部の接合部に粘土帯を持つ個体は1点のみ認められたが、主体となるのは粘土帯を持たない個体である。高坏は、確認した個体数は多くないが外反口縁高坏と碗形高坏が認められる。外反口縁高坏は外面の文様は確認できなかったが、比較的浅い高坏を呈しており、山中式の特徴がみられる。脚部の形態は、一部内湾化や短脚化したものが認められることから欠山式の様相もうかがえる。外来系土器が壺で認められた。形態などから菊川式の影響を受けたものと考えられるが、在地産土器と胎土の特徴は酷似している。土器の他に銅鏃が1点出土した。周辺遺跡からもこれまでに銅鏃の出土例はなく、特異性がうかがえる。

今回出土した土器の中心は、弥生時代後期前半に位置づけられる。その中でも、形態や文様の特徴から山中式新相段階の特徴をもつものが多く認められるが、一部弥生時代後期後半の欠山段階のものも含まれる。

2 今後の展望

今回の調査の結果、弥生時代後期の遺構・遺物が確認され、環濠と推定される溝や集落の存在が明らかとなった。検出された遺構の分布状況等から、集落は北から東側にかけて広がると推定されるが、これまでに当該地の北から東側にかけての調査事例は無く、加えて今回の調査では建物跡などの存在は確認できなかったことから、集落の様相は不明な点が多い。

また、周辺遺跡においても弥生時代後期の遺物が確認されている。特に別所前遺跡の西側に展開する田見合遺跡では、環濠と推定される溝等の遺構と弥生時代後期前半を中心とした遺物が確認されており、周辺遺跡との関連性についても検討していく必要がある。今後、さらなる調査成果の蓄積によって、別所前遺跡の詳細な構造が明らかになることに期待したい。

[参考文献]

- 加納俊介・石黒立人編 2002『弥生土器の様式と編年 東海編』
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993『箕輪遺跡』
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994『箕輪遺跡』
(財) 浜松市文化協会 1991『梶子遺跡Ⅷ』
(財) 浜松市文化協会 2002『田見合遺跡』
(財) 浜松市文化協会 2002『天王町村東遺跡』
(財) 浜松市文化協会 1997『天王中野遺跡2』
(財) 浜松市文化協会 2009『鳥居松遺跡5次 弥生時代編』
(財) 浜松市文化振興財団 2007『中田北遺跡』
浜松市遺跡調査会 1981『浜松市天王中野遺跡発掘調査報告書』
浜松市教育委員会 2003『浜松市遺跡調査集報』
浜松市教育委員会 2013『平成23年度 浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会 2020『平成30年度 浜松市文化財調査報告』

出土遺物観察表

凡 例

残存率：％表示、10％単位での切り上げ

反転：「反」は反転して図化したもの

大きさの単位は cm

回転体以外の大きさ表示 器径：長さ 器高：幅 口径：厚み

色調：『標準土色帖』（農林水産庁農林技術会議局監修）に準拠

Fig.	No.	取り上げ NO.	遺構 / 層位	種別	細別	残存%	反転	器径 cm	器高 cm	口径 cm	底径 cm	色調	その他
13	1	18	SD01	弥生土器	壺	10%						灰黄褐色	菊川式(古) 在地産
13	2	2・55	SD02	弥生土器	外反口縁壺	30%	反			11.8		にぶい黄褐色	頭径 7.6cm 外面スス付着
13	3	53	SD02	弥生土器	外反口縁壺	10%	反			13.0		にぶい黄褐色	
13	4	43・53	SD02	弥生土器	壺	10%	反					にぶい黄褐色	頭径 9.0cm
13	5	33・18・13	SD02	弥生土器	壺	20%	反					浅黄褐色	頭径 8.0cm 菊川式
13	6	2・41	SD02	弥生土器	壺	20%	反					灰黄色	頭径 9.4cm
13	7	18・38・41・43	SD02	弥生土器	壺	20%	反					灰黄色	頭径 9.4cm
13	8	43	SD02	弥生土器	壺	10%	反					にぶい橙色	
13	9	41	SD02	弥生土器	壺	10%	反					にぶい黄褐色	菊川式
13	10	13	SD02	弥生土器	壺	10%	反					橙色	頭径 5.7cm
13	11	36	SD02	弥生土器	壺	10%						にぶい黄褐色	伊場新 在地産 黒斑
13	12	45	SD02	弥生土器	壺	10%						灰黄褐色	
13	13	18	SD02	弥生土器	壺	10%						灰黄褐色	
13	14	44	SD02	弥生土器	壺	10%						にぶい橙色	伊場新 欠山(古)
13	15	43・53	SD02	弥生土器	壺	10%	反			9.6		浅黄褐色	木葉痕
13	16	33	SD02	弥生土器	壺	10%	反			8.6		浅黄褐色	
13	17	35	SD02	弥生土器	壺	20%				3.3		にぶい橙色	
13	18	18	SD02	弥生土器	壺	10%	反			5.2		灰黄褐色	
13	19	43	SD02	弥生土器	壺	10%	反			4.6		にぶい黄褐色	黒斑
13	20	33	SD02	弥生土器	壺	10%	反			7.5		にぶい黄褐色	
13	21	46	SD02	弥生土器	壺	10%				6.4		にぶい橙色	木葉痕
13	22	53	SD02	弥生土器	碗形 部高環	10%	反			21.0		褐灰色	
13	23	40	SD02	弥生土器	高環	20%	反					にぶい橙色	
14	24	53	SD02	弥生土器	台付甕	70%	反	23.8		20.6		にぶい黄褐色	スス付着
14	25	45・47・53	SD02	弥生土器	甕	40%	反	24.6		16.0		浅黄褐色	スス付着
14	26	53	SD02	弥生土器	甕	10%	反			20.6		褐灰色	
14	27	32・13・37	SD02	弥生土器	甕	30%	反	17.0		15.8		にぶい黄褐色	
14	28	2・47・52	SD02	弥生土器	甕	20%	反			10.8		にぶい黄褐色	
14	29	47	SD02	弥生土器	甕	10%	反			22.3		にぶい黄褐色	
14	30	18	SD02	弥生土器	甕	10%	反			14.5		灰黄褐色	
14	31	52・48	SD02	弥生土器	甕	20%	反			15.4		にぶい黄褐色	頭径 14.0cm
14	32	43	SD02	弥生土器	甕	10%	反			15.5		にぶい黄褐色	
14	33	49	SD02	弥生土器	台付甕	10%	反					浅黄褐色	
14	34	53	SD02	弥生土器	台付甕	30%	一部反					灰黄褐色	接合部径 5.2cm
14	35	42	SD02	弥生土器	台付甕	10%	反					にぶい黄褐色	
14	36	18	SD02	弥生土器	台付甕	10%	反			8.7		にぶい黄褐色	
14	37	50	SD02	弥生土器	台付甕	20%	反			10.3		にぶい橙色	
14	38	34・13	SD02	弥生土器	台付甕	10%				9.4		にぶい黄褐色	
14	39	13	SD02	弥生土器	台付甕	10%	反			8.4		にぶい橙色	
14	40	13	SD02	弥生土器	台付甕	10%	反			10.8		にぶい黄褐色	
16	41	56	SD03	弥生土器	折返口縁壺	10%	反			17.2		にぶい黄褐色	
16	42	58	SD03	弥生土器	壺	70%		9.8	7.7	3.8		にぶい黄褐色	
16	43	61	SD03	弥生土器	台付甕	30%	一部反			9.8		灰黄褐色	接合部径 5.4cm
16	44	57	SD03	弥生土器	台付甕	10%	反			10.0		にぶい黄褐色	
16	45	59	SD03	弥生土器	碗形 部高環	10%	反			21.0		にぶい橙色	
16	46	19	SD03	青銅器	銅鏃			3.6	1.0	0.4			重さ 3.6g
17	47	91	SD08	弥生土器	外反口縁壺	10%	反			12.1		浅黄褐色	頭径 9.0cm 菊川式
17	48	91	SD08	弥生土器	壺	10%	反					にぶい橙色	頭径 5.0cm 菊川式
17	49	89	SD09	弥生土器	壺	10%	反				7.8	浅黄褐色	木葉痕
17	50	91	SD08	弥生土器	台付甕	10%	反			9.6		浅黄褐色	
20	51	16	SK02	弥生土器	壺	10%	反			6.2		にぶい黄褐色	木葉痕
20	52	28・16	SK02	弥生土器	台付甕	10%	反			8.6		明褐灰色	接合部径 5.8cm
20	53	30	SK07	弥生土器	内湾口縁壺	10%	反	12.0		11.1		にぶい橙色	
20	54	10	SP03	弥生土器	台付甕	10%	反					にぶい黄褐色	
20	55	22	SP05	弥生土器	内湾口縁壺	10%	反	15.8		15.5		にぶい褐色	
20	56	79	SP34	弥生土器	折返口縁壺	10%	反			18.0		灰白色	
23	57	66	SX01	弥生土器	折返口縁壺	10%	反			22.0		浅黄褐色	菊川式 格子文
23	58	66	SX01	弥生土器	折返口縁壺	10%	反			24.0		にぶい橙色	
23	59	66	SX01	弥生土器	折返口縁壺	10%	反			14.0		灰黄色	
23	60	66	SX01	弥生土器	外反口縁壺	10%	反			12.8		にぶい黄褐色	
23	61	66	SX01	弥生土器	内湾口縁壺	10%	反			11.8		にぶい橙色	
23	62	66	SX01	弥生土器	壺	10%	一部反			4.8		浅黄褐色	
23	63	66	SX01	弥生土器	壺	10%	反			8.4		褐灰色	木葉痕
23	64	66	SX01	弥生土器	壺	10%	一部反			7.2		浅黄褐色	木葉痕
23	65	66	SX01	弥生土器	鉢	10%	反			16.6		にぶい黄褐色	菊川式? 搬入品
23	66	66	SX01	弥生土器	甕	10%				14.4		褐灰色	
23	67	66	SX01	弥生土器	台付甕	10%	一部反					灰褐色	接合部径 5.1cm
23	68	66	SX01	弥生土器	台付甕	10%	反					にぶい黄褐色	接合部径 6.2cm
23	69	66	SX01	弥生土器	台付甕	10%	反					灰黄褐色	接合部径 5.5cm
23	70	66	SX01	弥生土器	台付甕	10%	一部反			9.8		灰黄色	接合部径 5.0cm
23	71	66	SX01	弥生土器	台付甕	20%				9.8		灰黄褐色	接合部径 5.0cm
23	72	66	SX01	弥生土器	外反口縁壺	10%	反			24.0		にぶい橙色	
23	73	66	SX01	弥生土器	碗形 部高環	10%	反			17.4		浅黄褐色	
23	74	66	SX01	弥生土器	高環	10%						浅黄褐色	接合部径 5.0cm
23	75	92・91	SX03	弥生土器	外反口縁壺	10%	反			25.4		浅黄褐色	
23	76	67	SX03	弥生土器	壺	10%	一部反			7.4		浅黄褐色	
23	77	91・92	SX03	弥生土器	台付甕	10%	反			7.0		にぶい橙色	
24	78	1	包含層	弥生土器	外反口縁壺	10%	反			13.0		にぶい黄褐色	
24	79	94	南壁②	弥生土器	外反口縁壺	10%	反			12.0		灰黄褐色	
24	80	1	包含層	弥生土器	外反口縁壺	10%					11.6	にぶい黄褐色	頭径 7.6cm

Fig.	No.	取り上げ NO.	遺構 / 層位	種別	細別	残存%	反転	器径 cm	器高 cm	口径 cm	底径 cm	色調	その他
24	81	1	包含層	弥生土器	外反口縁壺	10%	反			12.2		にぶい黄橙色	
24	82	1	包含層	弥生土器	外反口縁壺	10%	反			13.4		にぶい黄橙色	
24	83	2	サブレ	弥生土器	外反口縁壺	10%	反			15.0		浅黄橙色	
24	84	1	包含層	弥生土器	内湾口縁壺	10%	反			20.4		浅黄橙色	
24	85	1	包含層	弥生土器	複合口縁壺	20%	反			15.2		にぶい橙色	頸径 9.0cm
24	86	1	包含層	弥生土器	複合口縁壺	20%	反			14.6		浅黄橙色	棒状浮文 3×3 方向
24	87	105	北壁 35 層	弥生土器	壺	60%		21.0			5.6	浅黄橙色	頸径 6.6cm
24	88	1	包含層	弥生土器	壺	10%	反					灰黄色	
24	89	1	包含層	弥生土器	壺	10%	反					浅黄橙色	
24	90	1	包含層	弥生土器	壺	30%	反					浅黄橙色	
24	91	1	包含層	弥生土器	壺	10%						灰黄色	円形浮文 3×3 方向
24	92	96	南壁④ 3 層	弥生土器	壺	10%						灰黄色	
24	93	1	包含層	弥生土器	壺	10%	反					にぶい橙色	
24	94	1	包含層	弥生土器	壺	10%						にぶい黄橙色	絵画土器 線刻文 在地
24	95	1	包含層	弥生土器	壺	10%	反			8.0		橙色	木葉痕
24	96	1	包含層	弥生土器	壺	20%				4.9		浅黄色	
24	97	1	包含層	弥生土器	壺	10%	反				7.2	浅黄橙色	木葉痕
24	98	1	包含層	弥生土器	壺	10%	一部反			8.4		灰黄色	
24	99	1	包含層	弥生土器	壺	10%	反			7.0		にぶい橙色	
24	100	94	南壁②	弥生土器	壺	10%				7.0		にぶい黄橙色	木葉痕
24	101	1	包含層	弥生土器	壺	20%	反			8.0		にぶい黄橙色	木葉痕
24	102	1	包含層	弥生土器	壺	10%				7.2		灰白色	
24	103	1	包含層	弥生土器	壺	10%	反			10.0		にぶい黄橙色	
24	104	1	包含層	弥生土器	壺	10%				7.6		灰白色	
24	105	1	包含層	弥生土器	壺	10%	反			10.0		浅黄橙色	
24	106	5	西側北壁	弥生土器	壺	20%				5.7		橙色	
24	107	3	中央平面	弥生土器	壺	10%				6.0		にぶい黄橙色	
24	108	94	南壁② 3 層	弥生土器	壺	10%	一部反			5.5		にぶい黄橙色	底部 黒斑
24	109	1	包含層	弥生土器	壺	10%	反			6.2		にぶい橙色	底部 黒斑
24	110	1	包含層	弥生土器	壺	10%				8.0		にぶい黄橙色	木葉痕
24	111	1	包含層	弥生土器	壺	10%				6.0		灰黄色	
24	112	6	北側サブレ	弥生土器	壺	10%				3.7		にぶい黄橙色	
24	113	1	包含層	弥生土器	壺	20%				4.2		橙色	
25	114	1	包含層	弥生土器	台付甕	40%	反	20.4	26.6	16.4	9.6	灰黄色	
25	115	98	南壁 39 層	弥生土器	く字大型甕	10%	反			32.3		にぶい黄橙色	
25	116	96	南壁 3 層	弥生土器	甕	30%	反	23.8		18.2		灰白色	
25	117	96	南壁④ 3 層	弥生土器	甕	70%		22.0		17.6		浅黄橙色	
25	118	1	包含層	弥生土器	甕	40%	反	23.6		19.3		浅黄橙色	
25	119	1	包含層	弥生土器	甕	10%	反			27.1		灰黄色	
25	120	1	包含層	弥生土器	甕	30%	反	22.0		17.2		にぶい黄橙色	
25	121	1	包含層	弥生土器	甕	10%	反	21.2		19.6		黄灰色	頸径 19.6cm
25	122	96	南壁④ 3 層	弥生土器	甕	20%	反	18.4		16.0		灰黄色	スス付着
25	123	1	包含層	弥生土器	甕	20%	反			17.4		浅黄色	頸径 17.4cm
26	124	1・94	南壁② 3 層	弥生土器	甕	40%		17.8		15.4		灰黄色	
26	125	1・94	南壁② 3 層	弥生土器	甕	20%	反			16.6		浅黄橙色	スス付着
26	126	1	包含層	弥生土器	甕	10%	反			15.8		にぶい黄橙色	
26	127	96	南壁④ 3 層	弥生土器	甕	10%	反			14.0		浅黄色	スス付着
26	128	1	包含層	弥生土器	甕	10%	反			27.4		にぶい黄橙色	
26	129	96	南壁④ 3 層	弥生土器	甕	10%	反			15.2		灰黄色	
26	130	1	包含層	弥生土器	甕	10%	反			14.8		にぶい黄橙色	
26	131	1	包含層	弥生土器	甕	10%	反			21.0		浅黄橙色	スス付着
26	132	1	包含層	弥生土器	甕	10%	反			20.0		褐灰色	
26	133	1	包含層	弥生土器	甕	10%	反			22.0		にぶい黄橙色	
26	134	96	南壁④ 3 層	弥生土器	甕	20%	反			14.4		にぶい黄橙色	
26	135	96	南壁④ 3 層	弥生土器	台付甕	20%	反					にぶい橙色	接合部径 5.6cm
26	136	94	南壁② 3 層	弥生土器	台付甕	10%	反					浅黄橙色	接合部径 5.6cm
26	137	1	包含層	弥生土器	台付甕	10%						灰黄色	接合部径 4.4cm
26	138	1	包含層	弥生土器	台付甕	10%	反					にぶい黄橙色	接合部径 5.6cm
26	139	1	包含層	弥生土器	台付甕	10%	反					にぶい橙色	接合部径 5.8cm
26	140	14	東側平面	弥生土器	台付甕	10%						にぶい黄褐色	接合部径 4.2cm
26	141	1	包含層	弥生土器	台付甕	10%	反					浅黄橙色	
26	142	1	包含層	弥生土器	台付甕	10%	反					にぶい黄橙色	
26	143	1	包含層	弥生土器	台付甕	10%	反					にぶい黄橙色	接合部径 5.0cm
26	144	1	包含層	弥生土器	台付甕	10%	反					にぶい黄橙色	
26	145	1	包含層	弥生土器	台付甕	10%	一部反					にぶい橙色	接合部径 5.4cm
26	146	1	包含層	弥生土器	台付甕	10%						にぶい橙色	
26	147	1	包含層	弥生土器	台付甕	10%	反			8.3		浅黄橙色	接合部径 5.0cm
26	148	96	南壁④ 3 層	弥生土器	台付甕	30%				11.0		淡橙色	
26	149	1	包含層	弥生土器	台付甕	10%	反			8.6		にぶい橙色	接合部径 5.6cm
26	150	1	包含層	弥生土器	台付甕	10%				8.8		灰黄色	接合部径 5.0cm
26	151	7	東側平面	弥生土器	台付甕	10%	反			7.5		にぶい橙色	接合部径 4.8cm
26	152	1	包含層	弥生土器	台付甕	10%	反			8.7		にぶい黄橙色	
27	153	1	包含層	弥生土器	外反環部高坏	10%	反			23.5		橙色	
27	154	1	包含層	弥生土器	外反環部高坏	10%	反			25.0		にぶい橙色	
27	155	2	サブレ	弥生土器	高坏	20%	一部反					明褐灰色	接合部径 5.0cm
27	156	1	包含層	弥生土器	高坏	20%	反					浅黄橙色	接合部径 4.0cm
27	157	98	南壁 39 層	弥生土器	高坏	30%				9.2		にぶい黄橙色	接合部径 4.4cm
27	158	1	包含層	弥生土器	小型高坏	40%				6.6		にぶい橙色	
27	159	96	南壁④ 3 層	弥生土器	高坏	10%	反				10.6	にぶい橙色	欠山
27	160	95・9・96	南壁 3 層	弥生土器	片口鉢	80%		20.8	11.7	20.4		浅黄橙色	
27	161	1	包含層	土師器	直口壺	50%	反	14.0	16.1	9.8	4.2	橙色	
27	162	1	包含層	灰釉陶器	碗	10%	反				7.2	灰色	

報 告 書 抄 録

書名(ふりがな)		別所前遺跡 4 (べっしょまえいせき 4)						
編著者名		川西啓喜 北澤志織						
編集発行機関		浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課 〒430-8652 浜松市中区元城町 103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (050) 3730-1391						
発行年月日		2020 年 7 月 31 日						
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
べっしょまえいせき 別所前遺跡	静岡県 浜松市 東区 市野町	22132	2-03-13	34 度 44 分 38 秒	137 度 46 分 07 秒	2019 年 11 月 5 日 ～ 11 月 20 日	210 m ²	宅地造成工事に 係る道路整備工 事（公道移管） に伴う埋蔵文化 財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
別所前遺跡	集落	弥生時代		土坑 溝 小穴 性格不明遺構		弥生土器 青銅器	弥生時代後期の集落を確認	
要約	別所前遺跡は、天竜川が形成した氾濫平野上に立地する。今回の調査では、弥生時代後期の溝、土坑、小穴等を検出した。検出した溝には環濠と推定されるものもあり、環濠の内側を中心に遺構が集中している。出土遺物は、弥生時代後期前半（山中式新相段階）を中心とし、加えて銅鏃が出土したことが注目される。別所前遺跡では、これまでに本格的な調査事例がなかったが、今回の調査において弥生時代後期を中心とした集落の存在が明らかとなったことが大きな成果と言える。							

別所前遺跡 4

2020 年 7 月 31 日

発 行 浜松市教育委員会

編集 浜松市市民部文化財課

(浜松市教育委員会の補助執行機関)

〒430-8652 浜松市中区元城町 103-2

印 刷 中部印刷株式会社



1 調査区全景（北東から）



1 調査区西部（南東から）



2 調査区東部（北東から）



1 SD01完掘状況（北東から）



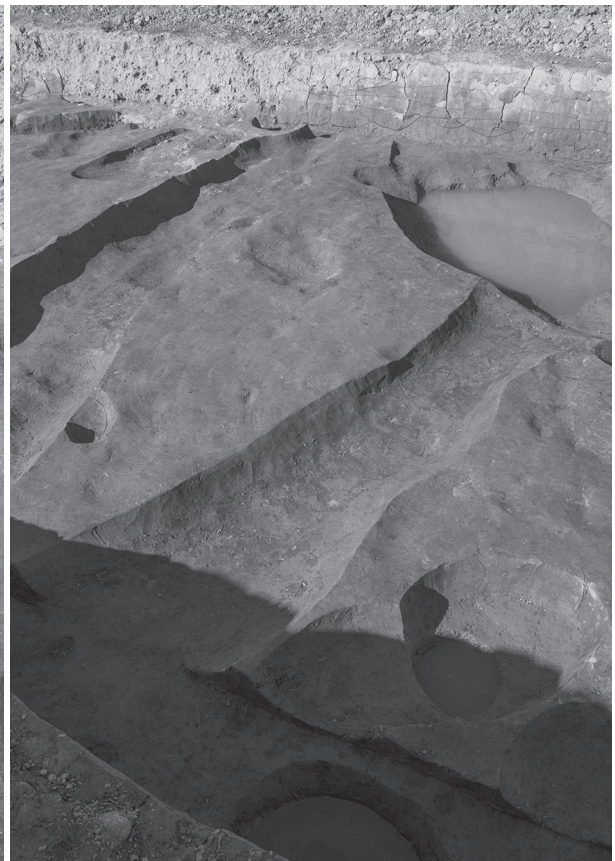
2 SD02遺物出土状況（南から）



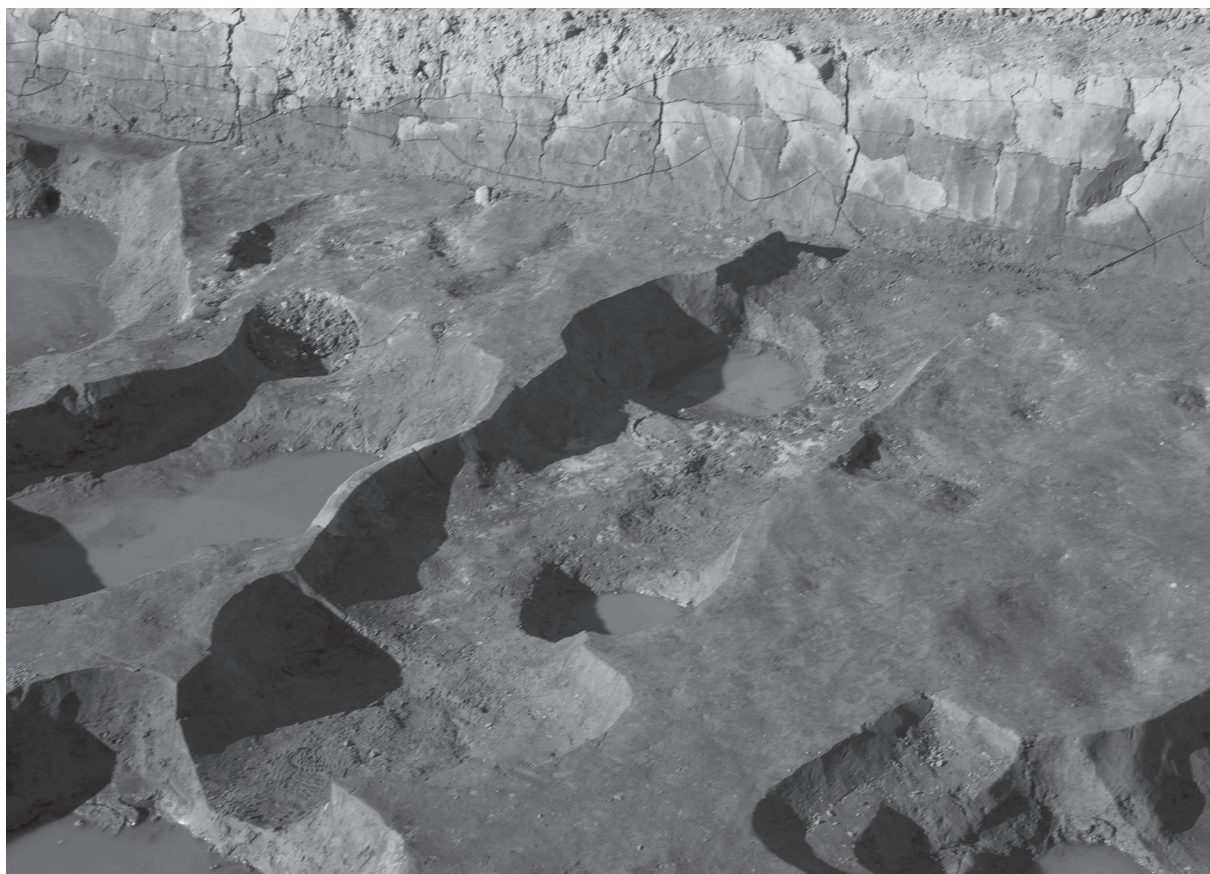
1 SD03遺物出土状況（南から）



2 SD02完掘状況（南東から）



3 SD03完掘状況（南東から）



1 SD04完掘状況（南から）



2 SD06・08完掘状況（北東から）



3 SD07完掘状況（北東から）



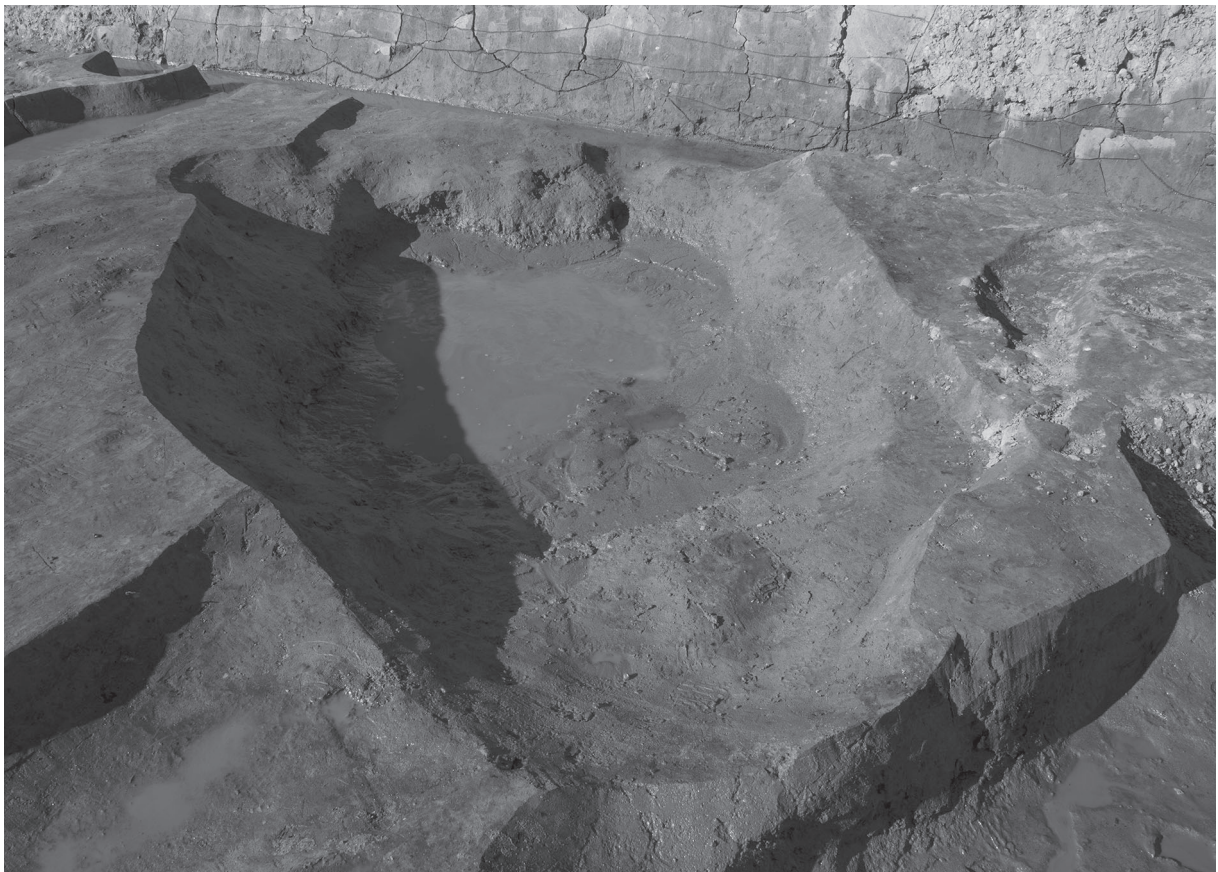
1 SK02遺物出土状況（西から）



2 SK03完掘状況（北西から）



3 SK05完掘状況（北東から）



4 SX01完掘状況（南から）



24



46



71



38



42



43



87

主要出土遺物（1）



主要出土遺物（2）

Bessyomae Site

The 4th Excavation Report

A Report of Archaeological Investigation
in Western Shizuoka Prefecture, Japan



July, 2020

Hamamatsu Municipal Board of Education